Catalog 19-#4

www.tambourine-japan.com
email: song@tambourine-japan.com

ご注文の際、プライス・コードもご記入下さい。
プライス･コード{ａ￥１６９０/Ａ￥１８９０/Ｂ￥２０９０/Ｃ￥２２５０/Ｄ￥２４９０}
（表示価格は税抜き）　別途消費税が加算されます

（送料）
※ご注文枚数に関係なく《一律２５０円》郵送
ただしＬＰを含む場合は一律５００円。
※代金引換送料（郵送）：初回 390 円/二回目以降 590 円何枚でも）
ＬＰを含む場合は＋２５０円。

注文方法サイト：　http://www.oct-net.ne.jp/tambouri/order.htm

【ご注文はできるだけ８/９までにお願いします】
注文方法１の場合を除き、発送はご注文受取り後約５日以内にしたいと思っていますが、無理な場合もあります。締切日に近いご注文の場合は、２週間ほどかかる場合もあります。電話注文はお受けしておりません。
●お問合せはメールにてお願いします。
●ご注文の際、プライス又はプライス･コードをお書き願います。
●カタログは郵便にてお届けします。

（振替用紙口座番号ミスの皆さま）
*前回、発送業務終盤に誤って昔使っていた郵便振替のスタンプを振替用紙に押すというミスをしてしまいました。メールで連絡が取れる方にはメールで、電話で連絡を取れる形には電話で、どちらも連絡が取れない方には郵便で連絡を取りました。連絡前に既に送金されていた方で、送金手数料を二重に支払われた方がおられましたら、お申し出下さい。ご返金させて頂きます。

（真夏の夜の夢カタログ？）
*夏は休むのが恒例なのに、真夏にカタログを発行？！前回からなるべくタムボリンの仕事を真面目にするようにしたら、早くご紹介したい新譜ＣＤがぞくぞく入荷してしまいました。中でもDick Gaughan の新譜(英国発売日は 8 月 1 日ですが、特別に一足早く発送してくれて、タムボリンには 7 月 25 日頃の入荷予定)や Andy Irvine&Luke Plumb の Luke と Kate Burke&Ruth Hazleton の Kate による Luke Plump & Kate Burke(二人ともオーストラリア人)の新譜(Fotheringay のアコースティック版の印象)やイングランドからの強力新譜等々は新鮮なうちにご紹介せねばと、堀田はりいと猫サリーのブログも休止して、急ピッチでカタログを作りました。

（分割払い）
*分割払いをご希望の方はお申し出下さい。最初のお支払いは請求額の半額になります。残り半額は 9 月 15 日まででＯＫです。

＊TOP 30 SELLERS(19－#3)＊

1)DERVISH:The Great Irish Song Book(Ireland)
2)BILL JONES:Wonderful Fairytale(England)
3)ASKEW SISTERS:Enclosure(England)
4)MARY ANN KENNEDY:Glaschu(Scotland)
5)NAOMI BEDFORD & PAUL SIMMONDS
:Singing It All Back Home(UK)
6)KATE RUSBY:Philosophers,Poets & Kings(England)
7)GAVIN SUTHERLAND:A Traveller's Tales(UK)
8)CHERISH THE LADIES:Heart Of The Home(Ireland)
9)MALINKY:Handsel(Scotland)
10)BRIGHDE CHAIMBEUL:The Reeling(Scotland)
11)ELIZA CARTHY:Restitute(England)
12)LEO KOSTER:Sings Gene Clark(USA)
13)CAROLINE SPENCE:Mint Condition(USA)
14)SVARTEVJA:Svartevja(Norway)
15)JOHNNY OG CONNOLLY:Fear Inis Bearachain(Ireland)
16)HANS THEESSINK:70 Birthday Bash(Holland)
17)REX FOSTER:Heart(USA)
18)HILLBENDERS:HillBenders(USA)
19)SNOWFLAKE TRIO:Sun Dogs(Ireland,Norway)
20)PAUANNE:Pauanne(Finland)
21)KATHRYN TICKELL & THE DARKENING:Hollowbone(England)
22)SIAN JAMES:Gosteg(Wales)
23)NEIL YOUNG:Time Fades Away Tour(USA)
24)ROGER McGUINN'S THUNDERBYRD
:Hammersmith Odeon Broadcast 1977(USA)
25)SEAN RYAN & PJ MALONEY
:Traditional Music Of Ireland Volume One(Ireland)
26)KIRSTI BAKKEN KRISTIANSEN:Linden(Norway)
27)VILDA:Vildaluodda/Wildprint(Lapland)
28)IAIN MATTHEWS:Orphans And Outcasts ～ A Collection Of
Demo's, Outtakes & Live Performances(UK)
29)PAUL MILLNS:A Little Thunder(UK)
30)JULIE JULY BAND:Knows Where The Time Goes(England)

Guitar, Re-issue, USA, Canada, British Folk, England, Scotland,

Ireland, USA(Trad), Europe ほか, NEW ARRIVAL, あとがき

（ジャケ写掲載分が初入荷と初コメント商品です）

[CD/GUITAR,BOUZOUKI 他]



(Tony & Julia)



(Ben Walker)

*TONY McMANUS & JULIA TOASPERN:Live In Concert　　B
（ケルティック･ギター名手の Tony McManus とドイツ人女性ギター＆ヴァイオリン奏者の Julia Toaspern による本ライヴ･アルバムは､なんとまあゴージャスなギター音楽＋α。ギター･デュエットによるアイリッシュで気持ち良く幕開けする本作は､アイリッシュ､スコティッシュ､ケープブレトン､ブルターニュ､アステゥリアス等の汎ケルト音楽に加えて､ギリシャ音楽にジャズにオペラ等まで､二人の得意とする音楽の幅で､フィンガーピッキングとフラットピッキングの妙技を繰り広げる。演奏やアレンジが超秀逸なために､アイリッシュがアイリッシュ＋αの異次元な音楽に生まれ変わっている。加えてクラシック畑の Julia がアイリッシュ等をヴァイオリンで演奏した曲などは､ソフトな音色が耳に心地よい。ギター妙技を尽くした様々な音楽を堪能して､最後はアイリッシュで気持ち良く幕を閉じる。この最後の曲{二曲のメドレー}は Julia がフラットピッキング奏法を始めた頃に覚えた二曲とのこと。ライヴでこの完成度､尋常じゃない。おまけに二人は唄まで。2019 作。Greentrax）
*BEN WALKER:Echo　　B
（ベスト･アコースティック･ギタリストの一人と賞賛されているギタリストの本デビュー･ソロ･アルバムは､Hazel Askew,Bella Hardy,Kitty Macfarlane,Laura Ward,Thom Ashworth,Laura Hockenhull{初耳のこの女性シンガー､凄い},Jinnwoo それにクレジットなしの古老などのシンガーをフィーチャーした驚くほど美麗なブリティッシュ･フォーク･アルバム。粒立ちの良い流麗なアコースティック･ギターを伴った各シンガーの唄は､各シンガーのどのレコーディング曲よりも輝いて聞こえ､息をのむ。シンガーは一曲一曲で入れ替わるが､アルバムとして統一感が感じられるのは､絶え間なく流れる Ben の英国的気品を帯びた流麗なギター･サウンドの効果か。音楽の深さも深い。心洗われる逸品。2019 作。Folk Room）
*PETER RATZENBECK:Outremer　　¥2790
（お宝。ゲスト:Andy Irvine。1995 年作。Shamrock）
*PETER RATZENBECK:Gitarero　　¥2790
（お宝。ゲスト:Hans Theessink。1990 作。Shamrock）
*ALEC STONE SWEET:Tumblin' Gap　　A
（アイリッシュとオールドタイム･ミュージックのギター演奏。アイリッシュは Planxty や Kevin Burke のレパートリー等をクローハンマー･スタイルで弾くギターは独特で､Alec Stone 独自のケルティック＆オールドタイム･ギター音楽を創作している全 16 トラック。2005 作。Solid Air）
*IAN CARMICHAEL:Ten Years On　　B
（アイリッシュ･バンジョー奏者の Ian Carmichael の演奏は職人芸的で､アイリッシュとスコティッシュと米国のオールドタイム･ミュージックの伝統的なリズムの特徴を追求･深化させることで､音楽に新たな生命力と魅力とを生み出している。2015 作。Splitrock Music）

[DVD/ＧＵＩＴＡＲ]
※国内製 DVDﾌﾟﾚｰﾔｰで再生可能
*MICHAEL MESSER:Guitar Maestros Series 1　　D

(ｽﾗｲﾄﾞ･ﾌﾞﾙｰｽ･ｷﾞﾀｰ奏者 M.Messer のｷﾞﾀｰ弾き語りﾗｲｳﾞ映像。"Main Featue"は Trevor Dann を話し相手に"Can't Be Satisfied"や"Walking Blues"など８曲を奏法に焦点を当てて演唱。"Additonal Track"は完全ﾗｲｳﾞで"Rolling&Tumbling"や"The Lone Wolf"など７曲を演唱。約 95 分。2006 作。Sound Technics)

*STEVE TILSTON:Guitar Maestros Series 1 D

(S.Tilston のｷﾞﾀｰ弾き語りﾗｲｳﾞ映像。鮮やかなﾌﾗｯﾄﾋﾟｯｷﾝｸﾞ･ｷﾞﾀｰの伴奏による弾き語り"Here Comes The Nights"から SSW の Steve の弾き語りの世界に吸い込まれる。"Main Featue の８曲、"Additional Track"の８曲の計 16 曲のﾊﾟﾌｫｰﾏﾝｽが拝める。2006 作。Sound Technics)

(CD/U．S．A.)





(J.J.Cale) (Gene Clark)

*J.J.CALE:Stay Around A

(2013 年に他界した J.J.Cale の未発表曲集。収録曲は 15 曲。J.J.Cale を聴いたのは 1982 年の"Grasshopper"までで、存命中最後のスタジオ録音盤の"Roll On"も未聴。しかし異界から聞こえてくるようなデビュー作の"Naturally"に静かな衝撃を受けてから 37 年も J.J.Cale から遠ざかってはいても、音楽の主が J.J.Cale であることはすぐにわかる。ヴォーカルを含めて基本的な音楽スタイルが全く変わっていないからだ。異なるのは"Naturally"の頃のスタイルをベースにレイドバック色を強めていて、音楽的に例えば Ronnie Lane や Eric Clapton のように心のままに音楽していること。だから音楽がとても優しい。未発表曲のコンピレーションなのに新作アルバムとして完成度が高い。15 曲の中では、バンジョーを爪弾きうたう"Wish You Were Here"やキーボードの伴奏をフィーチャーした"Maria"などのどちらかと言えば、異色曲が心に残った。このような曲があることが逆に本作の味わいを深めている。本作を聴いてよかった。2019 作。Because Music)

*J.J.CALE:Really A

(1972 作。ｶﾅﾀﾞMercury/製造年が古いので検品して送ります)

*GENE CLARK & FRIENDS:Live At The Three T's B

(1985 年５月にインディアナのクラブでの Gene Clark と仲間達の FM ラジオ収録ライヴ。確認できる仲間達は元バーズの Michael Clark と John York に元ビーチボーイズの Blondie Chaplin に元フライング･ブリトー･ブラザーズの Rick Roberts。ディランの"It's All Over Now,Baby Blue"そして自作曲"Just An Arrow"と自身のギターの弾き語りで静かにフライトを始める本作は、三曲目でヴォーカルが Blondie に変わって、ストレートなロック、続く四曲目と五曲目はザ･バンド風ロックという風で、気骨ある Gene Clark の弾き語りとザ･バンド風ロックとカントリーっぽくない時代のバーズ風ロックが混在した弾き語りを含めてエネル

ギッシュなライヴ。1984 年に"Firebyrd"をリリースしたあとに自身の音楽活動を総括するようなライヴ活動をやっていたんだね。1985 年/2019 作。Leftfield Media)

*DERROLL ADAMS:Feelin' Fine B

(Village Thing から 1972 年にリリースされた"Feelin' Fine"がベルギーの Best Seller から 1976 年にリリースされた"Along The Way"から６曲のボーナス曲を加えて CD 再発。"Feelin' Fine"の共演者は Wizz Jones,Danny Adams,Roland Van Campenhout で、"Along The Way"は Maggie Holland,Tucker Zimmerman,Youra Marcus,Danny Adams。バンジョーを爪弾きながらうたう低く柔らかな唄の数々は、心にふんわりと残る。全 18 曲。2017 作。Ghost From The Basement)

（CD/ＢＲＩＴＡＩＮ＆ＩＲＥＬＡＮＤ他）





(Donovan) (Ronnie Lane)

*DONOVAN:Bottom Line 1976 B

(Donovan の 15 枚目"Slow Down World"リリース直前の 1976 年４月にニューヨークのボトムラインで行われた FM ラジオ収録ライヴ。"Slow Down World"収録の Dark Eyed Blue Jean Angel"と The Mountain"に"Catch The Wind","Lalena,"Mellow Yellow","Hurdy Gurdy Man"等の名曲ほか全 19 曲。ギターの弾き語りを中心にしたスタイルによる Donovan の唄は終始絶好調で、パフォーマンスとして語りも唄に聞こえてしまうほど音楽的。そうした語りを含めた唄の抑揚が非常に豊かで、彼独特なある種メルヘンチックな世界を自然に創り出している。まるで特等席で楽しむドノヴァン･ライヴ１時間２０分。1976 年/2019 作。Unicorn)

*RONNIE LANE:Just For A Moment (Music 1973-1997) ¥11900

(Ronnie Lane の六枚組。"Anymore For Anymore","Ronnie Lane's Slim Chance","One For the Road","See Me"の四枚のアルバムに加えて、ライヴやスタジオ･セッションなどの稀少曲 50 曲以上収録。さすがに満腹。2019 作。Universal)

*DAVE WAITE & MARIANNE SEGAL:Paper Flowers A

(英国のフォーク･ロック･バンドの Jade の Dave Waite と Marianne Segal が Jade 結成以前にデュオで活動していた時代の 1967～1970 年の未発表音源から 22 曲を収録した編集盤。70 年代前後の米国のピュアな女性フォーク･シンガーの趣があって、その若草の香りの Marianne のヴォーカルと Marianne & Dave のヴォーカル･デュエットが新鮮。この時代、英国の若いフォーク･シンガーもミュージシャンも、米国音楽への憧れて音楽活動をしてましたよね。その真っ直ぐさと、ほのかに香る英国風香りが気持ち良い。2004 作。Lighting Tree)

*THE LYLE McGUINNESS BAND:Elise,Elise B

(Graham Lyle,Tom McGuinness,Hughie Flint,Alan Dunn,

Chrissie Stewart の Lyle McGuinness Band の 1983 年の"Acting On Impulse"から 12 曲にシングル盤収録の"What Does It Take"と未発表音源曲二曲を加えた 15 曲収録。いつ聴いても幸せ気分なゆるくて何とも愛おしい二流センスの英国ロック。ゲスト:モイア・ブレナン{クラナド}。1997 作。Diamond Recordings/検品して送ります)

*PHILLIP GOODHAND-TAIT & THE STORMSVILLE SHAKERS
:Ricky-Tick...40 Years On C
('Phillip Goodhand-Tait & the Stormsville Shakers'時代{1965-1966}の 10 曲。2005 作。Span TV)

[CD/ＵＳＡ]



(Buddy & Julie)



(Jeb Loy Nichols)

*BUDDY & JULIE MILLER:Breakdown On 20th Ave. South A
(Buddy & Julie 夫妻の 10 年振りの新作だ。現在 Julie は病気療養中で回復の見通しが立たない状況で、本作は Julie の寝室に階下の自宅のスタジオから録音機材を運び込んで収録したという。確かに Julie のヴォーカルはかつての妖気は影を潜め、精気のないヴォーカルに聞こえる。それを補っているのが、Julie のスローな唄に寄り添うようにうたう Buddy の覇気ある唄と手作りの気概あるルーツロック・サウンドだ。そして Buddy の励ましに後押しされるように Julie はありったけの声を振り絞る。感動無しには聴けない夫婦の強い絆から生まれた稀有のアメリカン・ルーツロックだ。病を負って書いた唄は思いが深い。2019 作。New West)

*JEB LOY NICHOLS:June Is Short,July Is Long A
(Jeb Loy のツアーバンドの Westwood All-Stars をバックに従えてウエールズで収録された Jeb Loy Nichols の 11 枚目のソロ・アルバム。そっとささやくようにうたう独自のスタイルと「真夏の夜の夢」的な Jeb Loy の世界は最高潮。レゲエ調だったり、南部ロック調だったり、ソウル調だったりする Jeb Loy の音楽の世界は、ジャンル云々を超えて、Jeb Loy の魔法が掛けられたノスタルジックな、どこか 70 年代ロックの面影を残す夢見音楽の世界。暑い日に寝転がって、ぼーっとして聴いていたい。これはアートの域。2019 作。Compass)

*REX FOSTER:Heart A
(2016 にリリースされた"The Lost Recordings"で 1970 年に名盤と呼ばれているＳＳWアルバムを出していることを知ったテキサスのＳＳWの Rex Foster の新作で通算九枚目。Gary P. Nunn や Townes Van Zandt や Guy Clark と同時代を生きてきた今の Rex の唄は、かくしゃくとした気骨さを持ちつつ、角が取れて丸っこい。何かうたいこんだ末に身につけた歌心のようなものが、凄く自然体の唄とフォーク～カントリー・ロックなサウンドから感じられる。じわりじわりと唄物語の世界へと誘う Rex の味のある唄には

ゾクゾクっとすらする。Dan Cooper や Peter Rowan との共作を含む心ほほえむ全 10 曲。2019 作。Steadyboy)

*GEORGE ENSLE:Home A

(1948 年 9 月生まれというから 70 歳代になったテキサスのＳＳＷの大御所 George Ensle のおよそ 10 年振りの新作。一つ一つ思い出を思い出すようにギターやレゾネイターギターを弾き語るようにうたう George の唄の何と心優しく心和むことだろう。過ぎ去ったことすべてが懐かしい思い出の唄になっていて、唄からしみじみ感やほほえみ感がやんわりとにじみ出ている。６歳年上の Jerry Jeff Walker 翁が春の風景でもながめながら、ゆったりと手作りの思い出の唄をうたった感じだろうか。全曲で Mike Rieman{ﾍﾞｰｽ}と Dony Wynn{ﾄﾞﾗﾑｽ、ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ}がバックアップしているが、音が優しい。本作は Richard J.Dobson の霊と仕事に捧げられている。2018 作。George Ensle)

*GEORGE ENSLE:Build A Bridge A

(Townes Van Zandt が「George Ensle は最も影響力のある尊敬すべき SSW の一人」と賞賛するテキサスのＳＳＷの George Ensle の 2008 年作。どことなく Jerry Jeff Walker 風なのだが、Bill Staines 風でもあって、唄に爽やかさが感じられる。2008 作。Berkalin/検品してお送りします)

*POINT QUIET:Walking In The Wild A

(Point Quiet は SSW の Pascal Hallibert 率いるオランダの五人組だが、音楽は一応ルーツロック系だが、シンガーの Pascal のソロ・アルバム的色合いが濃い。オランダのシンガー＆バンドというのは忘れた方が良い。Pascal の唄は実に緩く渋い。Lenard Cohen 風に詩的に練り上げられた唄は、超然とすら感じられもする。そして滋味 豊かな彼の唄は、聴けば聴くほど味わいが深い。究極のスルメ味ＳＳＷアルバムと言っても過言ではない。前に出ない奥行きのある「音」も職人技。名盤の域。2019 作。Continental)

*MICHAEL MCDERMOTT:Orphans A

(ナッシュビルの Collard Green スタジオで録音されたヴェテランＳＳＷの M.Mcdermott の新作。ミュージシャンとしてクレジットされた 10 名の中にはナッシュビル在住のＳＳＷの Will Kimbrough の名も。録音はナッシュビルだが、音作りはカントリー色の薄い小気味よくノリの良いルーツロックで、ロックの躍動と一体化した Michael 本人の表現力豊かで陰影に富むヴォーカルが実に素晴らしい。自作の唄に悲喜こもごも感があって、感動の幅が広く深い。2019 作。Pure Sky)

*CODY CANADA & THE DEPARTED:3 A

(本作でのバンドの編成は Cody Canada{ｳﾞｫｰｶﾙ、ｴﾚｷ&ｱｺｰｽﾃｨｯｸ･ｷﾞﾀｰ他}と Jeremy Plato{ｳﾞｫｰｶﾙ、ﾍﾞｰｽ他}と Eric Hansenheavy{ﾄﾞﾗﾑｽ}の三人組ルーツロック･バンドの四枚目。リーダーの Cody Canada はテキサスのレッドネック･シンガーのタイプで、テキサス･スタイルのフォークやルーツロックをベースに南部ロックや西海岸ロックにまで色気を出して、バンドのフォーク～ロックを彩る。ヴェテランの風格。2018 作。Blue Rose)

*HANS THEESSINK:Journey On A

(全 11 曲中９曲で Terry Evans がバッキング･ヴォーカルを務めている 1997 年のソロ。この時代も真っ直ぐに南部音楽志向の音楽。脂がのってる。新作を聴けば、彼が愛する音楽に揺るぎがなかっ

たことがわかる。Blue Groove)

[CD/ＵＳＡ{female}]







(Kelly Hunt)　(Louisa Branscomb)　(Anna Tivel)

*KELLY HUNT:Even The Sparrow　A

(メンフィス生まれでカンザスシティを拠点に活動する女性 SSW の Kelly Hunt の全曲自作のデビュー作。初期の Bob Dylan に生き写しの"Across The Great Divide"で静かに、しかし聴き手は身震い必至な曲で幕開けする本作は、ヴォーカル･スタイルを含めて初期の Bob Dylan の唄のようなアメリカン･フォークの素朴な味わいと同時に、アメリカン･フォークのルーツの深い味わいをもあって、一見素朴だが、アメリカン･フォークとしての味わいは、おそろしく深い。加えて、彼女自身のヴォーカルは南部娘的な気丈さの中にも繊細さが感じられるもので、自身が奏でる古風なからリズミカルなテナーバンジョーの音色とともに、ひと味違う味わいを放っている。w.Stas Heaney{ﾌｨﾄﾞﾙ､ﾍﾞｰｽ､ｵﾙｶﾞﾝ他}, Tyler Giles{ｷﾞﾀｰ､ﾍﾟﾀﾞﾙ･ｽﾃｨｰﾙ}。名盤誕生。2019 作。Rare Bird)

*LOUISA BRANSCOMB:Gonna Love Anyway　A

(ブルーグラス系のヴェテラン女性 SSW の Louisa Branscomb の新作で通算 12 枚目。Missy Raines との共同プロデュースによる本作はハイブリッドなブルーグラス系フォークの趣。小気味良いブルーグラス･サウンドは極めて上質感があり、Louisa のヴォーカルも男女のゲスト･シンガーとのデュエットも清々しさの中に鼻歌でもうたうかのような、かつ一緒にうたったり、一緒に音楽することを楽しむかのようなリラックスした雰囲気があって、良い意味でヴェテラン･シンガーの余裕綽々感が感じられる。共演者もヴェテラン揃いだが、唄も演奏も熟練者ならではの味わいが実に軽やかに醸し出されている。w.Alison Brown,Dale Ann Bradley,Missy Raines,Stuart Duncan,Sierra Hull,Molly Tuttle,Tina Adair,Becky Buller,Jenni Lyn Gardner,Steve Gulley,Kimber Ludiker,Bryan McDowell,Jeanette Williams, Celia Woodsmith。2019 作。Compass)

*ANNA TIVEL:The Question　A

(異色の女性 SSW の Anna Tivel の待望の新作は、上下逆さのジャケット写真のような？非日常感が心地よい SSW アルバム。リラックス･ムードでささやくようにうたう Anna の唄は、どんよりした曇り空のような、或いは夜空に光る月明かりのような感触で、そっと夢見心地な気分へ誘う。音楽的にもフォーク、ロック、ジャズをとろーりと混ぜ合わせて、ハイセンスに練り上げたようなサウンドで、奥が深く、味わいも深い。唄も含めてトータルに完成度が高い。聴いている間は時間が止まってしまう気分。異色のシンガーによる格別なアルバム。w.Shane Leonard{各種ｷﾞﾀｰ､ﾄﾞﾗﾑｽ､ｼﾝｾ他}､Courtney Hartman{ｴﾚｷ&ｱｺｰｽﾃｨｯｸ･ｷﾞﾀｰ}, Ben Lester{ﾍﾟ

ﾀﾞﾙ･ｽﾃｨｰﾙ､ﾋﾟｱﾉ他},Jeremy Boettcher{ﾍﾞｰｽ},Josh Gallagher {ｳｰﾘｯﾂｱｰ､ｵﾙｶﾞﾝ他}､Jeffrey Martin{ｳﾞｫｰｶﾙ他},etc. 2019 作。Fluff&Gravy)

*ALELA DIANE:The Pirate's Gospel(Deluxe Edition) C

(Alela Diane の 2006 年のデビュー作に未発表音源曲 10 曲を加えて､新たに二枚組で発売されたデラックス版。本作は過去と未来や人生､死､誕生などについて思索した自作の唄を父親のスタジオで録音したもので､唄もギターの伴奏もいたって素朴ながら､唄の味わいはどのフォーク系シンガーよりも深いと思えるほど深い。感情を押し殺し､投げやりにも感じられる彼女の唄は､心に深く響く。名盤中の名盤。2006/2018 作。Rusted Blue)

[CD/ＣＡＮＡＤＡ]



(Small Glories)

*THE SMALL GLORIES:Assiniboine & The Red A

(Small Glories は Wailin' Jennys のオリジナル･メムバーの Cara Luft とマルチ楽器奏者{本作ではアコースティック＆エレキギターを担当}でシンガーの JD Edwards の二人組。実績のある Cara のシンガーとしての魅力は承知していたが､相方の JD Edwards も､ルーツ志向タイプのシンガーとしても凄い魅力なのを知った。阿吽の息で絞り出すようにうたう二人のヴォーカルは､土埃舞うルーツ･サウンドを伴って､信じられないほど見事な男女のヴォーカル･デュエットを見せつけている。近年､これほどヴォーカルもサウンドもドラマティックで覇気あるルーツ･ロックを聴いたことがない。アルバム･タイトルはカナダの大平原を流れる二つの川の合流地点の意で､二人の心はカナダの大平原の中。2019 作。Compass)

*AD VANDERVEEN:I Was Hank Williams A

(かつて Iain Matthews､Eliza Gilkyson とトリオで"More Than A Song"を発表したことのあるカナダ系ドイツ人 SSW の Ad Vanderveen の本作は､フォーク･シンガー/SSW としての原点に帰るうたうことに真っ直ぐなアルバム。ギターの弾き語り のみならず､適度にロック的な音作りがなされたナムバーやホーンや女性ハーモニーが入るナムバーもあるが､いぶし銀の唄の味わいは､SSW アルバムとして円熟度を極めていて､アルバムを通して渋く感動的。2018 作。Blue Rose)

*HIDDEN AGENDA DELUXE & OH SUSANNA:Angels In The Snow A

(オランダのヴェテラン･アメリカン･ロック･バンドの Hidden Agenda Deluxe がカナダの女性 SSW の Oh Susanna をメムバーに招いて制作したクリスマス･アルバム。The Band の"Island"収録の "Xmas Must Be Tonight"で The Band 風いぶし銀ロックで幕開けする本作は､いぶし銀アメリカン･ロックから SSW 風そして Oh Susanna のヴォーカルをフィーチャーした女性 SSW 風と聴かせ所

色々。2018 作。Continental）

［CD/ＵＫ，ＩＲＥＬＡＮＤ］



（Edgelarks）



（Odette Michell）



（Nigel Richard）

*EDGELARKS:Feather　B

（何たる素晴らしさ。Edgelarks は Hannah Martin{ヴォーカル、フィドル、バンジョ}と Phillip Henry{ヴォーカル、ギター、バンジョー、ドブロ、ストンプボックス}の二人組で BBC Radio 2 Folk Awards の"Best Duo"賞受賞者。カンブリアの自宅で作曲した曲を生のサウンドを活かせるようにとカンブリアからは少し離れたデボンの"The Green Room"で収録されたという本作は、二人の唄もサウンドも有機的というか、音楽にデジタル感が皆無で、演奏が微細で、音楽の色彩感が豊かで、Hannah のシンギングはたおやかで、例えば June Tabor などのアルバムに宿るような深淵さが感じられるもの。またバンジョーのサウンドがこれほど魅力的に感じられるアルバムを聴いたことがない。タイトルではないが、羽根のような不思議なふわふわ感がメッチャ気持ち良い。2019 作。Edgelarks）

*ODETTE MICHELL:The Wildest Rose　B

（ハートフォードシャーを拠点に活動する女性 SSW の Odette の初アルバム。トラッド曲"True Lovers Farewell"以外の曲は全曲 Odette の自作曲。Megson の Stu Hanna のプロデュースによる本作は、英国トラッドの香りはそよ風程度の爽やかで、愁いのあるブリティッシュ・フォーク。この感じはある種 70 年代の英国フォーク風で、正統的純良英国フォークとして素直に「良いなあ」と思ってしまう。しかも Odette のヴォイスはか細くて清々しいから、そんな感じの英国フォークにぴったし。プロデューサーの Stu に加えて、Phil Beer や Cara Dillon のツアー・メムバーの Toby Shaer のお二人が心から付き添って、野性のバラのように美しい Odette の着飾らない唄を優しく引き立てている。2019 作。Odette Mitchell）

*NIGEL RICHARD:Not Before Time　B

（本職はバグパイプほか楽器職人。Bert Jansch の一枚目を聴いて人生が変わったというスコットランド人 Nigel Richard の本デビュー作は、何と初期 Bert Jansch や初期 Davy Graham などの創世記のブリティッシュ・フォークのようなミラクルな空気感に満ちたブリティッシュ・フォーク。全曲 Nigel の自作曲で、ギターのサウンドは前述お二人のギターの響きを発し、Negel のヴォーカルは、飾りっ気がなく素朴。その素朴さに何とも言えないヒューマンな味わいが醸し出されていて、そう言えば 70 年代の SSW にもこんな感じの SSW がいたっけ、と懐かしい気分になってしまった。インド音楽風アプローチの曲などは、ふと Davy Graham を思い出した。Ross Ainslie や Amy Geddes ほか全８名もの伴奏者と３名のホーン奏者がクレジットに名が記されているが、音楽は Nigel のギタ

一又はシターンの弾き語りをベースにした毅然たるブリティッシュ･フォーク。2019 作。Garvie Music)

*NAOMI BEDFORD:Tales From The Weeping Willow B

(Naomi はまるで英国の Emmylou Harris。今の Emmylou ではなく、70 年代の。Naomi の声の響きは白人系アメリカン･ルーツ音楽の故郷のような響きなのだが、土臭さよりはむしろ優美さや夢見心地感が感じられるもの。鮮やかなアコースティック･ギターの伴奏を中心にしたサウンドも新鮮。2011 作。Dusty Willow)

*PAUL MILLNS:A Little Thunder B

(Paul Millns との出会いは彼の 1982 年リリースの四枚目"Till The Morning Comes"。穏やかな Joe Cocker 風ブルージーなヴォーカルに一辺で惚れ込んだ。15 歳の時に聴いた Ray Charles の"Georgia On My Mind"のパワーとエモーションにぶっ飛んだという彼は、その後 Bob Dylan や Tim Hardin などの影響を受けて、ＳＳＷの道を歩み始めて、四十数年。Joe Cocker 風ブルージーなヴォーカルは今もなお健在で、"Georgia On My Mind"のフィーリングが穏やかながら魂のこもった唄の数々に感じられる。ある意味 Paul Millns 流ゴスペル･アルバムとも呼ぶべき孤高の境地の音楽。大雑把に言って、Joe Cocker のエモーションと Tim Hardin のリリシズムとを併せ持ったＳＳＷ。音作りも唄同様に深く味わい深い。録音はドイツ。2019 作。Acoustic Music)

*PAUL MILLNS:Unsang Heroes B

(Paul Millns の 1997 年録音で 1998 年リリースのアルバム。1998 作。April Music)

*CHRIS MANNERS:Exit,Pursued By A Bear B

(イングランドのＳＳＷでギター奏者の Chris Manners の新作で通算三枚目。第一印象は"Rosemary's Sisters"の Huw & Tony Williams。鮮やかなブリティッシュ･フォークなギターを爪弾きうたう唄は、きっちりブリティッシュ･フォーク的抒情を香らせていて、至福気分になる。そして骨董品的価値と言うと失礼だが、今も変わらずブリティッシュ･フォークの基本スタイルを悠々と貫いている Chris 氏にエールを送りたくなる。Chris の相棒の Tim Blythe{ﾊｰﾓﾆｰ･ｳﾞｫｰｶﾙ､ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ､ﾌﾞｽﾞｰｷ､ｷﾞﾀｰ他}と Jon Loomes{ｳﾞｧｲｵﾘﾝ､ｱｺ}の二人のミュージシャンが共演。唄心あるシンガーによる良き唄が全 15 曲。2019 作。Shutterstock)

*ALISON O'DONNELL:Exotic Masks And Sensible Shoes A

(Mellow Candle の Alison O'Donnell の新作。前作"Climb Sheer The Fields Of Peace"の延長線上の独自の「夢のようなドラマ」は本作ではシンプルに深みを増している。本作のサウンドの中心を担うのはカナダ人ピアニストの Kevin Scott。ピアノのみならず、ハープシコードやオルガンも奏でて、唄目線で Alison の夢のような唄を引き立たせる演奏をしている。そういう意味では、どちらかと言えば、夢想色に彩られた前作に較べ、弾き語り的志向性の強いＳＳＷ的な味わいが深まっている。かつてなく Alison の夢のような唄が身近に感じられる唄達だ。お年寄りと呼ばれる歳になっても、Mellow Candle 時代とめざす音楽の世界が変わらないのは凄い、と思う。2019 作。Floating World)

*ALISON O'DONNELL:Climb Sheer The Fields Of Peace A

(Alison O'Donnell の 2017 年作。Mellow Candle 時代の音楽、その美意識と通底する音楽を齢を重ねた Alison がひとり、今の目線で創

作したのが本作。Alisin の頭の中は独自の「夢のようなドラマ」を創作すること。アイルランド人ギター＆電子楽器奏者で SSW でもある Dave Colohan。Dave は Alison が描く唄の世界に寄り添い、必要最小限の美麗な音響を創作し、音で Alison の頭にある「夢のようなドラマ」を彩る。2017 作。Mega Dodo)

*ALISON O'DONNELL:Hey Hey Hippy Witch A

(Mellow Candle の Alison の 2009 年作。12 トラック＋1 ボーナス・トラックの全 13 トラック。全曲自作曲。Alison のヴォーカルは終始優美で穏やか。ことさらにフォーク・ロックの衣装で、或いはケルトの衣装で着飾ることはなしに、ただ一人の SSW として、自分の唄を誠実にうたっていて、それだけで滋味豊か。2009 作。Freeworld)

*ALISON O'DONNELL & ISABEL NI CHUIREAIN:Mise Agus Ise A

(その Alison とアコ、キーボード奏者の Isabel とによる故郷アイルランドのルーツに根ざしつつ、ロックやジャズの要素も融合させた秀逸作。元 Mellow Candle の David Williams{ｷﾞﾀｰ、ﾌｨﾄﾞﾙ、ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ}が参加。2006 作。Osmosys)

*JO CHEDGEY:D'Anam ALainn A

(アイルランド人の女性 SSW の Jo Chedgey の 2009 年作。本作はアイルランドへの美しい思いが込められていて、彼女の思いや思い出と一緒に旅する気分。化粧っ気なしのスッピンの唄が唄の鮮度を落とすことなく聴き手の心に沁み渡る。現在英国暮らしの Jo が、故郷を離れて輝きを増す Jo の珠玉の唄たちだ。2009 作。Osmosy)

*THE BROTHERS GILLESPIE:The Fell B

(ノーサンバーランドの James と Sam の Gillespie 兄弟の二枚目に当たる新作。初めて聴く二人のフォーク、兄弟のソロ・ヴォーカルとデュエットと渋いフィドルとギターが織りなすフォークは渋く麗しくかつ愛おしいフォーク。兄弟の穏やかで英国的に愁いのあるハーモニーはそこはかとなく美しい。影響を受けたシンガーとして Dick Gaughan,Anne Briggs,Leonard Cohen,Kathryn Tickell などの名を挙げている。2018 作。Brothers Gillespie)

*ALASTAIR MacDOUGALL WITH PAUL ANDERSON:Trees May Bud B

(A.MacDougall は 1990 年代はじめから活動するというヴェテラン・フォーク・シンガー＆ギター奏者が名スコティッシュ・フィドル奏者の P.Anderson と組んだ本作。全 12 曲中４曲がトラッド曲に Archie Fisher や Tom Paxton や Darrell Scott 等のフォーク系の唄をうたったもので、それぞれの唄を愛しむようにうたう彼の唄はトラッド・シンガーというよりは、心優しい SSW 風で、気分ほっこりになる。"Songs"という副題を付けたくなるような唄があったかく感じられるアルバムだ。2018 作。Laural)

*PAUL STEPHENSON:Mother Nature's Rules D

(ハイブリッド SACD。英国人の SSW の Paul Stephenson の新作。Paul の唄は James Taylor が英国のカントリーサイドで悠々自適の生活を送り、良き隣人達と人生を楽しむかのような穏やかで心和む唄。そんな唄も魅力的だが、彼が奏でるアコースティック・ギターのマジカルな響きも凄く魅力的。アコースティックな高音質にこだわる Stockfisch らしい音響創りがより彼のギター・サウンドの魅力を引き出し、唄と音楽の鮮度を上げる効果をもたらしている。Lea Morris のバッキング・ヴォーカルが心和ませる。2018 作。Stockfisch)

*REG MEUROSS:Reg Meuross D

(ハイブリッド SACD。もう何枚もソロ・アルバムを発表していて、ヒューマニティーある彼の唄はフォークフェスなどで人気の SSW という。以前のアルバムには Karen Tweed や Phil Beer や Jackie Oates なども参加したという。その Reg Meuross の新譜。初めて聴く Reg の唄は「何て心優しいの！」。メロディはソフトでヴォーカルは深呼吸をするように落ち着きが深い。ここでも Stockfisch のワンランク上を行くアコースティック・サウンドが見事で、夢見心地な Reg の唄を本当に夢見心地にしている。おそらく彼のアルバムでこれほど美しいアルバムはないのでは？！2018 作。Stockfisch)

*GINA LE FAUX:In My Life A

(ほぼ Martin Simpson{ﾄﾞﾌﾞﾛ､ﾃﾚｷｬｽﾀｰ} と Andy Cutting{ﾒﾛｰﾃﾞｨｵﾝ} が全面バックアップする良質の女性ＳＳＷアルバム。Gina のヴォーカルは Iain Matthews のような高音が伸びる男性シンガーのような声質とヴォーカル・スタイルで、M.Simpson の味わいのあるドブロの伴奏で、心象風景や心模様をゆったりとうたう。一曲一曲が唄のスケッチのよう。2009 作。Le Faux Music)

*LUCY WARD:Single Flame A

(2012 年、BBC のフォーク部門で「新人賞」に当たる"Horizon Award"賞受賞の稀有の才を持つ女性 SSW の Lucy Ward の二枚目。Lucy が作る唄は独特だ。英国の昔話、特に不気味な話や不思議な話が好きで、不思議ブリティッシュ・フォークの世界を旅する感じだ。トラッド曲が二曲ある。その内の一曲「神様、私は嵐の中で死にたくありません」{船津訳}は、June Tabor のトラッド的ムードにどきっとさせられもする。Produced by Stu Hanna。2013 作。Navigator)

[DVD/ＥＮＧＬＡＮＤ] PAL

※PAL 専用 DVDﾌﾟﾚｰﾔｰ/ﾊﾟｿｺﾝで再生可能

*NIC JONES:The Enigma Of Nic Jones A

(1982 年二月の交通事故の振り返りから幕開けする Nic Jones のドキュメンタリー DVD。2010 年の"Sidmouth Folk Festival"での Nic Jones Trio{Nic Jones,Joe Jones,Belinda O'Hooley} のライヴ他 88 分。Topic)

*MADDY PRIOR THE CARNIVAL BAND
:An Evening Of Carols & Capers A

(Maddy Prior & The Carnival Band が 2003 年に行ったクリスマスツアーのライヴ。ライヴ 33 曲 97 分と Extra Feature21 分 30 秒。ケースの解説書留めには元々解説書なし。ラップ包装なし{開封}。2005 作。Park)

[LP+CD/ＥＮＧＬＡＮＤ]



(Kate Rusby 2LP+1CD)

*KATE RUSBY:Philosophers,Poets & Kings ¥3790

(Kate Rusby の新作で通算 17 枚目。ダブル･ジャケットの二枚組カラー{ピンク}LP＋CD の限定盤。Damien O'Kane のギターなどサウンドこそ新しめだが､Kate のシンギングは昔の Kate のような清純でしみじみ感のある味わいで胸キュン。"Bogey's Bonnie Belle"や"The Farmer's Toast"などの伝統歌や Fairport の "Crazy Man Michael"などを含む全 11 曲。2019 作。Pure)

*BELLOWHEAD:Matachin D

(イングランド屈指のトラッド･バンド"Bellowhead"のボーナス CD 付 LP 限定盤。2008 作。Navigator)

［CD/ＥＮＧＬＡＮＤ］







(Thom Ashworth) (Julie July) (Nancy&James)

*THOM ASHWORTH:Head Canon B

(ギターリストの Ben Walker:Echo で素晴らしいシンギングを聴かせていたイングランドの若き SSW でトラッド･シンガーの Thom Ashworth の新作。ベース･ギター奏者でギター系楽器の奏者でもあるが､ベース･ギターの低音とドラムスが地響きを起こし､毅然としたシンギングが素晴らしいトラッドの名曲"High Germany"で幕開けする本作は､何より､Thom の揺るぎないシンギング､それも原野に立ち､遙か彼方に向かってシンギングするかのような見事なシンギングに骨抜きにされる。渋いフィドルの伴奏であろうが､無伴奏であろうが､またフォークロック調であろうが縦横無尽。若いが､器が大きい上に､トラッドをうたう唄心と独自のセンスに基づく自由な表現力がある。2019 作。Thom Ashworth)

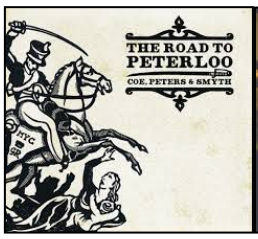
*JULIE JULY BAND:Lady Of The First Light C

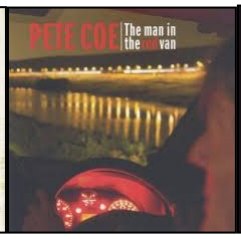
(Sandy Denny ファン必殺のデビュー作に続く Julie July Band の二枚目が早くも発売された。Sandy Denny ソング集を出していなければ､おそらく出逢えていなかったバンドだが､この全曲､ドラムスを除くバンド･メムバー作曲による本作は､英国のフォーク･ロック･バンドとして独自の清新なフォーク･ロックを創作していて､心踊らされる。前作とは打って変わって､全曲目がバンドのオリジナル曲という潔さは､バンドの結束力と音楽の才に裏打ちされたものであることは､清々しくかつ愁いのある Julie July のヴォーカルと共に体現された小気味よく快活なフォーク･ロックが証明している。明確に Fairport や Sandy Denny とは一線を画した堂々たる英国フォーク･ロックだ。2019 作。Aurora Folk)

*NANCY KERR & JAMES FAGAN
:An Evening with Nancy Kerr & James Fagan C

(N.Kerr と J.Fagan 夫妻のアルバムとしては９年振りの新作で､初ライヴ･アルバム。ライヴ地はハートフォードシャーとシェフィールドの二箇所。James が激しくかき鳴らすギターの伴奏で Nancy の毅然としたシンギングで幕開けし､続く Nancy の超然としたフ

ィドルと James の熱いギターの伴奏で、二人の毅然としたシンギングが疾走する二曲目と二人のテンションの高さとスリリングな演奏に息をのむ。息をのませて一気に頂点に達したあとからが本作のお楽しみ。二人はソロとデュエットで、悲喜交々な唄を味わわせてくれるが、幕開けの二曲が「天国」だった分、そのあとの心のこもった唄たちの味わいが深い。今更だが、Nancy も James もトラッドをうたうために生まれたかのような理想的なシンギングと音楽が満喫できて、実際にライヴショーを観てるかのような気分になるライヴ・アルバムだ。全 15 トラック。2019 作。Little Dish)







(Coe,Peters,Smyth)　(Pete Coe)　(Dovetail Trio)

*COE,PETERS & SMYTH:The Road To Peterloo　B
(Pete Coe{ヴォーカル、ブズーキ、メローディオン} と Brian Peters{ヴォーカル、メローディオン、コンサーティーナ、ギター、フィドル} と Laura Smith & Ted Kemp の Laura Smyth{ヴォーカル、チェロ、コンサーティーナ} のトリオによる新作。1819 年 8 月 16 日にマンチェスター起こった「ピータールーの虐殺」{広場で選挙法改正を求めて集会を開 いていた群衆に騎兵隊が突入して鎮圧を図り、多数の死傷者が出る惨事となった(Wikipedia)}。当時、この事件にまつわるブロードサイド・バラッドが多数発行されたという。イングランドを代表するトラッド・シンガーの三名はバラッドの中から厳選したバラッドをイングランドのトラッドの香り立つシンギング＆ハーモニーと音楽で生き生きと演唱する。各シンガーのイングランドのトラッドの基本に立ち返ったシンギングが何とも感動的。英国トラッド・ファンが帰るべき音楽。2019 作。Backshift Music)

*PETE COE:The Man In The Red Van　B
(2017 年リリースの Pete Coe のソロ・アルバム。全 10 曲中 6 曲が"Banks of Red Roses"や"World of Misery{Shenandoah}"などの伝統歌＆バラッドで２曲が自作曲と他作曲が２曲。一曲一曲、バンジョー、メローディオン、ブズーキ、ギター、ダルシマーをとっかえひっかえし、それらの楽器の伴奏で、Pete は朗々とシンギングする。真っ直ぐに唄心に溢れている。クレジットには多数のゲスト・ミュージシャンの名が列記されているが、ドラムスとコーラスが加わった６曲目の"The Wall Of Troy"以外は、弾き語りと言ってよいスタイル。2017 作。Backshift Music)

*PETE COE:In Paper Houses(2004 作。Backshift Music)　B

*PETE COE:In Paper Houses(2004 作。Backshift Music)　B

*PETE COE:Backbone(2010 作。Backshift Music)　B

*THE DOVETAIL TRIO:Bold Champions　B
(Rosie Hood{ヴォーカル}、Jamie Roberts{Gilmore & Roberts の Roberts/ヴォーカル、ギター}、Matt Quinn{コンサーティーナ、ヴォーカル} の一姫二太郎のイングランドのトラッド・ユニットの Dovetail Trio の新作で二枚目。イングランドのトラッドの伝統的スタイルに立ち返

るようなトリオのシンギングとサウンドに気分リフレッシュし、心洗われる。彼らが模範とするスタイルは Copper Family～Young Tradition だが、加えて Rosie のシンギングと醸し出される音楽は Shirley Collins 風な味わいも放っている。そんな彼らのシンギングを Matt Quinn のカントリー･ダンスな？コンサーティーナがよくもり立てている。イングランドのトラッド･ファンなら拝みたくなるような孤高の美しきトラッドだ。Copper Family も草場の陰で喜んでいるに違いない。2019 作。GR)

*THE DOVETAIL TRIO:Wing Of Evening B

(Dovetail Trio の清々しいデビュー作。2015 作。Rootbeat)

*BEN WALKER:Echo B

(ベスト･アコースティック･ギタリストの一人と賞賛されているギタリストの本デビュー･ソロ･アルバムは、Hazel Askew,Bella Hardy,Kitty Macfarlane,Laura Ward,Thom Ashworth,Laura Hockenhull{初耳のこの女性シンガー、凄い},Jinnwoo それにクレジットなしの古老などのシンガーをフィーチャーした驚くほど美麗なブリティッシュ･フォーク･アルバム。粒立ちの良い流麗なアコースティック･ギターを伴った各シンガーの唄は、各シンガーのどのレコーディング曲よりも輝いて聞こえ、息をのむ。シンガーは一曲一曲で入れ替わるが、アルバムとして統一感が感じられるのは、絶え間なく流れる Ben の英国的気品を帯びた流麗なギター･サウンドの効果か。音楽の深さも深い。心洗われる逸品。2019 作。Folk Room)

*ASKEW SISTERS:Enclosure B

(伝統的詩に曲を付けた曲を含め全曲トラッド曲ずくめの Askew Sisters の新作。多くは二人がマニュスクリプトや民謡コレクション等から発見した伝統歌。まるで「これ面白い！」と発見した時の感動もシンギングや音楽になったかのような微細な表現に富む二人のシンギングと二人が奏でるフィドルやチェロやメローディオン等の演奏は女性がうたう英国トラッドの深い情緒に満ちていて、極楽気分。英国トラッド･アルバムの極めつけ的不思議さと優美さと気品が音楽から放たれている。天下一品の英国トラッド。2019 作。Oakmere Music)

*KATHRYN TICKELL & THE DARKENING:Hollowbone B

(Kathryn Tickell がこれほど壮大なノーサンバーランド音楽を創作するとは思ってもみなかった。ユネスコ文化遺産にも登録されているイングランド北部、スコットランドとの境界線近くに築かれたローマ帝国最北端の国境線のハドリアヌスの長城から発掘された古代の楽器"Hollowbone"に触発されて制作した挑発的で斬新な先鋭ノーサンバーランド音楽で、そのピュアーな想像力故のエネルギーはプログレッシヴ･トラッドとでも呼びたいほど。音楽のレンジもアラブ風音楽の域にも達しようかと思えるほど。伝統音楽をベースに想像力を限りなく膨らませた音楽は圧巻。Kathryn と共に素晴らしい演唱を展開するのは、Cormac Byrne{ﾊﾞｳﾛﾝ､ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ},Amy Thatcher{ｱｺ､ｼﾝｾ,ヴｫｰｶﾙ},Kate Young{ヴｫｰｶﾙ､ﾌｨﾄﾞﾙ},Kieran Szifris{ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ},Joe Truswell{ﾄﾞﾗﾑｽ}。2019 作。Magnetic North East))

*RUTH NOTMAN & SAM KELLY:Changeable Heart B

(10 年振りの Ruth Notman の三枚目に当たる新作。今回はアイルランド系英国人シンガーでマルチ楽器奏者の Sam Kelly とのデュ

オ･アルバム。仕掛け人はKate Rusbyのご主人で、本作のプロデューサーのDamien O'Kane。二人に望んだのはおそらく、フォークやトラッドの名曲それ自体が持つプリミティヴな味わいを壊さずにうたうこと。そう言う意味では、Ruthの2007年のデビュー作"Thread"と通じる音楽性を保持していて、"Thread"の延長線上の素朴だが極上の男女のデュエット版として結実している。Ruthの素朴なシンギングはデビュー時頃のKate Rusbyのシンギングを想起させもする。2019作。Pure)

*THE TRANSPORTS "A Tale Of Exile And Migration" A

(Peter Bellamyの伝説的名作"The Transports"{オーストラリアへの囚人の搬送の歴史的実話をもとに制作されたバラッド･オペラ}から40年。その"The Transports"を新たなラインナップで、再演したもの。新たなラインナップは、The Young'uns{Sean Cooney,David Eagle,Michael Hughes},Faustus{Benji Kirkpatrick,Saul Rose,Paul Sartin}にNancy Kerr,Rachael McShane,Greg Russell,Matthew Cramptonの、トラッド第二世代の精鋭達十名。Nancy KerrとRachael McShaneの歌姫二人のシンギングが光っている。全28トラック。2018作。Hudson)

*BROOM BEZZUMS:Winterman A

(Broom BezzumはAndrew CadieとMark Bloomerの二人組。本作は三枚目。驚くのは二人の英国トラッド/フォークの気品と気高さに充ちたヴォーカルとギターとフィドル。その質の高さは、初期のSpiers&Bodenと肩を並べる。大半の曲でKatie Dohertyがヴォーカルで加わっていて＋αの魅力の英国トラッド/フォークで魅了する。Andy Mayのノーサンブリアン･パイプスが加わった８曲目がこれまた圧巻。本作は冬とｸﾘｽﾏｽの伝統曲集。2012作。Steeplejack Music)

*LEVERET:Inventions A

(Andy Cutting{ｱｺ､ﾒﾛｰﾃﾞｨｵﾝ}､Rob Harbron{ｺﾝｻｰ ﾃｨｰﾅ}そしてTom Sweeney{ｳﾞｧｲｵﾘﾝ､ｳﾞｨｵﾗ}のLeveretの2017年作。本作はスタジ･ライヴで、イングランド的な気品とロマンティックさが音楽の根っこに感じられる気持ちの良い音楽。それはAndy Cuttingが1990年代初めにChris Woodと組んで創作した音楽のような心の深いところで感動する音楽。曲目はモリス･ダンスの曲調だったり、トラッドの曲調だが、好きな散歩コースを曲にした曲や友達に捧げた曲や好きな曲からひらめいて作った曲等、風景が浮かぶような一曲一曲は、気流のように連なって躍り舞う。2017作。Rootbeat)

*BOB AND GILL BERRY:Echoes Of Alfredy B

(｢暖炉のそばでうたって楽しむ｣イメージで制作されたというBob & Gill夫妻の新作は、オックスフォードシャーのフォークソング収集家のAlfred Williams{1877-1930}が収集した民謡を中心に演唱したアルバムで、二人のシンギングといい、二人やゲストによるモリス･ダンス風音楽、それに土臭い英国トラッド･サウンドといい、イングランドのオーセンティックなトラッドの味わいと楽しさが自然体で溢れたアルバム。全16曲。2018作。WildGoose)

*MISCHIEF AFOOT:Mischief Afoot B

(コッツウォルズを拠点に活動するMischief Afootは、Becky Dellow{ﾌｨﾄﾞﾙ},John Davis{ﾘｺｰﾀﾞｰ､ﾊﾞｳﾛﾝ},Jeff Gillett{ｳﾞｫｰｶﾙ､ｷﾞﾀｰ､ﾏﾝﾄﾞｰﾗ､ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ､}のトリオ。選曲はイングランド、アイ

ルランド、スコットランドのトラッドやその関係のミュージシャンの曲。彼らの手にかかれば、アイリッシュであろうとイングリジャケ写のように悪がしっこい妖精になって？楽しむトラッドが楽しい。全 14 曲。2018 作。WildGoose)

*BOB FOX & JOHN TAMS:A Garland For Joey B
(副題"The War Horse Songbook"。「ウォー・ホース～戦火の馬～」は、1982 年に出版されたマイケル・モーパーゴによる児童小説を舞台化した演劇で、スティーヴン・スピルバーグ監督により映画化もされているが、本作は演劇のために John Tams がトラッドのスタイルで作詞作曲した唄の中からハイライトの唄を Bob Fox がギターの弾き語りでうたったアルバム。驚くのは、Bob Fox の 60 歳半ばを過ぎてもなお、70～80 年代に Stu Luckley とのデュオで味わわせた英国トラッド調に毅然として、円やかにコブシの利いたシンギングと、ドキッとするほど、70 年代英国トラッドの空気に充ちたきららかなギターの音色を発していて、味わい深い。全 12 曲。2017 作。Fledg'ling)

*WHAPWEASEL:Skirl Naked A
(1998 年作の 1 枚目。Dave Ainsley のメローディオンを中心によくまとまった五人組エレクトリック・カントリー・ダンス・バンド。Old Swan Band と Tiger Moth を混ぜたような印象。Produced by Rick Kemp。Whapweasel)

*WHAPWEASEL:Burn A
(サックスの Fiona と Stuart が加入し 7 人組になった Whapweasel の 2000 年作。Produced by Rick Kemp。Whapweasel)

*STICK IN THE WHEEL:Follow Them True B
(ロンドンの英国フォーク・ロック・バンドの二枚目。リード・ヴォーカルの Nicola Kearey の突っ張った感じのシンギングといい、70 年代英国フォーク風で尖って、ごった煮的なロッキン・フォークというかトラッドは、強いインパクトがある。サウンド的にはバンドの創設メムバーでギター奏者の Ian Carter のギターがバンド・サウンドの要になっていて、Davey Graham・Bert Jansch 系ギターを底力にしたふくよかなブリティッシュ・ギターで気を吐き、英国フォーク風不思議感を彩る。2017 作。From Here)

[CD/ＷＡＬＥＳ]

*JENNY SORRENTI:Medieval Zone C
(ウエールズ人の母とイタリア{ナポリ}人の父を持つ Jenny の 2001 年作。本作は彼女らしい地中海音楽、地中海古層の音楽、汎ケルト音楽の幽艶な香り高い音楽。ケルト的かつ地中海的なサウンドが織り成す幻想的で優美なサウンドに包まれた Jenny のヴォーカルは夢幻的でスピリチュアル。名盤。2001 作。Celtica Napoletana)

*BLODAU GWYLLTION:Llifo Fel Oed B
(Blodau Gwyllion は小説家で女性 SSW の Manon Steffan Ros とギター奏者の Elwyn Williams の二人組。全曲ウエールズ語で、母親がうたっていたというトラッド曲一曲以外は全曲 Manon の自作曲。赤子を寝かせ付けるようにそっと優しくうたう Manon の唄も、Elwyn の繊細で穏やかなアコースティック・ギターの響きも、この世の物とは思えない穏やかで普遍性が感じられる響きがあって、ほんわかと心和んでしまう不思議に心地よい音楽。2018 作。Gwymon)

［CD/ＳＣＯＴＬＡＮＤ］





(Dick Gaughan)　(Karen Marshalsay)

*DICK GAUGHAN:The Harvest Tapes　A

(Dick Gaughan の新譜。副題"The Definitive Gaughan Concert From 1982"。2016 年に脳卒中を起し、療養生活をしてきた Dick Gaughan は順調に回復をし、昨年から音楽活動を再開。本作は名盤"Handful Of Earth"の翌年の 1982 年に、Dick Gaughan が米国マサチューセッツにある Old Cambridge Baptist Church で行ったライヴ 10 トラック{12 曲}と未発表音源曲 3 トラックを加えた 13 トラック{15 曲}を収録したアルバム。37 年前の D.Gaughan の弾き語りライヴは、正に正座して「拝聴」したくなるほど、見事な Gaughan 節に身震いさせられる。10 トラック目の"The Freedom Come All Ye"では、このコンサートに出演していた Johnny Cunningham が泣きのフィドルを奏でていて、Gaughan 節の味わいをより豊かにしている。ブックレットには白鬚をたくわえた今の Gaughan が愛犬と撮った写真が拝める。お宝 CD 誕生。ご祝儀価格にて販売。2019 作。Greentrax)

*KAREN MARSHALSAY:The Road To Kennacraig　B

(副題"Traditional Scottish Harp Music"。女性スコティッシュ・ハープ奏者の K.Marshalsay のデビュー作。彼女はガット弦ハープを中心に金属弦クラルサッハとバロック・ブレイ・ハープを演奏するが、彼女のハープ演奏は、ストラスペイなどのスコットランドの様々な伝統曲やバグパイプ曲のピブロックなどを演奏し、さらに、スコティッシュ・スタイルの自作曲やアイリッシュ風な曲を演奏し、スコティッシュ・ハープ音楽として奥が深い。しかも三台のハープの特徴を生かした演奏は、音楽に多彩さを生んでいて、音響的に華やかに感じられる。とりわけパイパーの Allan MacDonald から教わったという、通常ハープ曲には向かないピブロックの演奏が、むしろ本作の価値を高めている。Produced by Robin Morton。2019 作。Cramasie)

*ALEXANDER MCCALL SMITH & JAMES ROSS
:These Are The Hands　B

(作家のアレグザンダー・マコール・スミスがスコットランドの過去と現在の海にまつわる出来事や話などを綴った詩にピアニストの James Ross がスコットランドのトラッドのスタイルで曲を付け、元 Cherish The Ladies の Michelle Burke とスコットランドのヴェテラン・トラッド・シンガーの Kathleen MacInnes の二人がソロで、あるいはデュエットしたアルバム。二人のシンガーは感情移入が豊かで、かつ James Ross のスコティッシュ流ピアノの表現力が豊かで、大衆的なスコティッシュ・ソングとして感動の深さが深い。w.Patsy Reid,Ryan Young,Liam Bradley,etc. 2019 作。Greentrax)

*MARY ANN KENNEDY:Glaschu　A

("Gaelic Singer of The Year"賞を受賞した"An Dan"から二年。伝統音楽一家育ちの生え抜きのトラッド･シンガーで、その分野で指導的な役割を果たしている Mary Ann Kennedy の二枚目。本作は Michael Marra などの唄全 16 曲をゲール語に置き換えて{ゲール語歌詞は母親の Kenna}うたったアルバムで、伝統歌のスタイルにのっとった曲調に聞こえる曲調とゲール語の響きを活かしきった凛とした美しいシンギングは、スコテイッシュ･シンギングに新たな息吹を注ぎ込んでいて感動的。Finlay Wells の清澄なアコースティック･ギターが冴え渡っている。P28 のブックレット付。2019 作。ARC)

*IAIN MacFARLANE & INGRID HENDERSON
:Cockerel In The Creel B

(Blazin' Fiddles のヴェテラン･フィドル奏者の Iain MacFarlane とヴェテラン女性ハープ奏者の Ingrid Henderson の夫婦によるフィドルとハープ又はフィドルとピアノのデュエットをベースにしたスコティッシュ･トラッド･アルバム。Iain はフィドルのみならずアコーディオンやホイッスルも演奏するが、二人の音楽はアットホームな音楽。演奏はスコティッシュ･トラッドのセンスが散りばめられていて、スコティッシュの香りを放つスッピンのサウンドが心地よい。音楽はシンプルだが、追い求めた末の珠玉かつ侘び寂びのスコティッシュ･サウンドを放っている。味と心で勝負の音楽。2019 作。Old Laundry Productions)

*NORTHERN FLYWAY:Northern Flyway B

(Northern Flyway はシェトランド生まれのシンガーでマルチ楽器演奏家の Inge Thomson とシンガーで SSW で鳥類生物学者の Jenny Sturgeon と SSW でマルチ楽器演奏家の三人の女性アーティストをフィーチャーした鳥保護音楽プロジェクト。鳥の鳴き声も取り込んだ本作は、同じレーベルから発売された Karine Polwart{Inge Thomson は K.Polwart Band のメムバー}の自然環境保護への思いを込めた"A Pocket Of Wind Resistance"と通底する夢のように清々しいフォーク･アルバム。類い稀な美しいフォークとして傑出している。2018 作。Hudson)

*TRAIL WEST:From The Sea To The City B

(四太郎から六太郎編成になったグラスゴーのフォーク･ロック･バンドの"Trail West"の三枚目。野趣な Ian Smith のヴォーカルはそれだけで希少価値だが、アコ、ホイッスル、ハイランド･バグパイプやアコースティック･ギターなどによるスコティッシュ･トラッド風味満点な音楽は、潔いロック･サウンドと合体して、独自の血湧き肉躍るおやじスコティッシュ･フォーク･ロックを体現している。2018 作。TW)

*KARINE POLWART:A Pocket of Wind Resistance B

(元 Malinky のヴォーカルで、スコットランドを代表する女性フォーク･シンガーの K.Polwart の 2017 年作。本作は毎年 9 月にアイスランドやグリーンランドの海食崖からスコットランドのフォース湾を通ってファラ･フロー･ロック湖に渡ってくる雁の群れへの思いを中心に自然環境保護への思いを唄にしたもの。美しく、夢のような音楽。2017 作。Hudson)

*WILLIAM JACKSON:Duan Albanach B

(Ossian の創設メムバーでスコットランド屈指のハープ奏者 William Jackson の 2003 年のアルバム。前半は自身のハープとテ

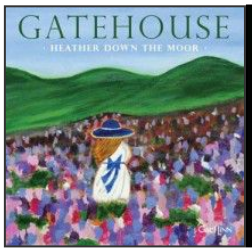
ィン･ホイッスルによる演奏集で､スコティッシュ･スタイルの粒立ちの良い見事なハープの音色は､耳の掃除をしてくれるほど美しく気高い｡後半は Celtic Connections のライヴで､スコットランドの古代詩に触発されて作曲した曲集｡Mackenzie Sisters に Iain MacDonald,Jerry O'Sullivan,Alasdair Fraser 等の精鋭達をゲストに迎えて､優美かつ空想的な音楽世界を創作する｡Mill)

*CRUINN:Cruinn A

(スコットランドを代表するトラッド･シンガー四名{Rachel Walker,Fiona Mackenzie,James Graham そして Anam の Brian O hEadhra}によるソロやデュエットや四人のアカペラ等によるスコットランド･ゲール語によるシンギング･アルバムの名作｡2013 作｡Cuinn)

[CD/ＩＲＥＬＡＮＤ系]

デジパック･タイプを含め､元々開封されているものが多数あります｡







(Gate House) (Grainne&Brendan) (Kevin,Colin,Patrick)

*GATEHOUSE:Down The Moor A

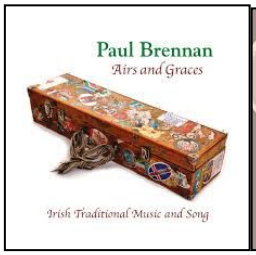
(ゲール語と英語の両方でオールアールランド･チャンピオン･シンガーの歌姫 Rachel Garvey を擁する二姫二太郎のアイリッシュ･グループ"Gatehouse"の待望の二枚目｡メムバーの残りはフルートの John Wynne､フィドルの John McEvoy そしてコンサーティーナとギターの Jacinta McEvoy｡それぞれがアイリッシュ･ミュージックの精髄を極めた彼らのアイリッシュは余裕のあるペースを維持して､オーソドックスに聞こえて､演奏は洗練されていて､絶妙で味わい深いし､ゲール語の唄二曲と英語の唄三曲で美声を披露する Rachel のシンギングは､言葉にならないほど麗しい｡余裕綽々の大横綱級アイリッシュだ｡ゲスト:Alan Kelly,John Joe Kelly, Michael McCague,Conor & Paddy McEvoy｡Matt Molloy と Altan のマレードが大絶賛｡2019 作｡Gael-Linn)

*GRAINNE & BRENDAN:Songs From Ireland A

(北アイルランド出身の女性フォーク･シンガーの Gráinne Hunt と二度のギター部門オールアイルランド･チャンピオンの Brendan Walsh の二人組によるアイリッシュ･フォーク･アルバム｡Gráinne のヴォーカルは昔のデダナンのヴォーカルを務めたらバッチリな感じだ｡Gráinne は"Song For Ireland"や"The Lakes of Ponchartrain"や"Mo Ghile Mear"などのアイリッシュ･フォークの名曲 13 曲を Brendan の卓越したアレンジと繊細極まりない美麗なギターの伴奏で､Gráinne が英語､ゲール語で凛々しくうたう｡全体として小さな村の小さな教会のような清らかな空気感のある室内で生録したような静謐な中に気品のあるアイリッシュ･フォーク･アルバムに仕上がっている｡Brendan の細やかで光沢感のあるギターの音色とともに､馴染みの名曲が新たな感動で美しく甦っ

ている。高音質なのに CD-R 仕様。2019 作。Gráinne Hunt & Brendan Walsh)

*KEVIN CRAWFORD,COLIN FARRELL & PATRICK DOOCEY
:Music And Mischief C
(Lúnasa の K.Crawford{ﾌﾙｰﾄ､ﾎｲｯｽﾙ}と Lúnasa のツアー・メムバーの C.Farrell{ﾌｨﾄﾞﾙ､ﾎｲｯｽﾙ}にオールアールランド・チャンピオンの Patrick Doocey{ｷﾞﾀｰ}を加えたトリオによる新作。Kevin と Colin が吹き､奏でる音楽はまるでミニルナサ。Kevin の笛と Colin の笛がデュエットする曲が多く､二人は笛遊びでもするかのように様々なアイリッシュの風を巻き起こす。その自由さと様々に変化する音楽が楽しい。中には駆け出したくなるようなマジカルに軽快な曲も。Mike McGoldrick は｢ファンタスティックな新作が出来たね！｣と賛辞を寄せている。アイリッシュの笛音楽ファンは有頂天保証。2019 作。Brooklyn Boy 1)





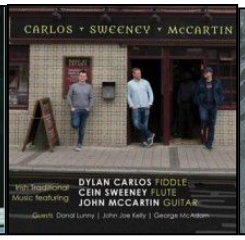


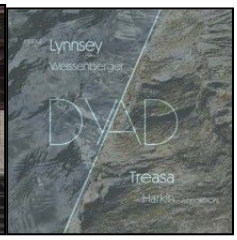
(Paul Brennan) (We Banjo 3) (Treasa Ni Mhiollain)

*PAUL BRENNAN:Airs And Graces D
(副題"Irish Traditional Music & Song"。ロンドンを拠点にアイリッシュのみならず､アイリッシュの要素を取り込んだルネサンス音楽やロックや映画音楽{ハリーポッターと死の秘宝の結婚式の場面の音楽}まで幅広い活動をしてきたイリアンパイプス奏者でシンガーの Paul Brennan のアイリッシュを謳歌した集大成的二枚組。主に彼のバンド"Carrig"～Brendan McGlinchey{ﾌｨﾄﾞﾙ}, Nigel Portman Smith{ﾍﾞｰｽ/Andwella,Magna Carta,Pentangle}, Kev Boyle{ｷﾞﾀｰ,ｷｰﾎﾞｰﾄﾞ}～とによるアイリッシュは､Davy Spillane 風なアイリッシュ・ロック的な優雅なサウンドを発散し､ヴォーカルはアイリッシュおやじ魂があって､身震いさせられる。やわなアイリッシュじゃない。アイリッシュ魂も音楽もぶっとい。全 59 曲の 34ﾄﾗｯｸ。2019 作。Carrig Music)

*WE BANJO 3:Roots To Rise Live C
(Enda & Fergal Scahill 兄弟と Martin & David Howley 兄弟の四太郎の"We Banjo 3"の新作は米国ミシガン州でのライヴ。何だ､この盛り上がりは！バンジョー､フィドル､マンドリン､ギター､バウロン等による音楽は見事にアイリッシュとブルーグラスやオールドタイム・ミュージックとのモザイク音楽をエネルギッシュに生み出していて､圧巻。David Howley のヴォーカルは米国フォーク～ブルーグラス色がにじみ出ているから､アイリッシュ・ファンのみならず､米国のカントリーやフォーク・ファンの感性をくすぐるだろう。米国ルーツ音楽の目線で聴くと､ご先祖の音楽と一体化した音楽として､超魅力的に聞こえてくる。前作"Haven"は RTE Radio 1 の"Folk Album of 2018"賞を受賞。2019 作。We Banjo 3)







(Diane Ni Chanainn)　(Dylan,Cein,John)　(Lynnsey & Treasa)

*TREASA NI MHIOLLAIN:Lan Mara　D

(アラン諸島のシャン･ノース･シンガーのパイオニア的存在の女性シンガーのTreasa婆さんの二枚組。パイオニア的存在とは言っても、結婚式やパーティー会場やシンガー達の集いなどの日常生活の場でうたってきたというTreasaのシンギングは、自然な抑揚があって、無伴奏のアカペラであっても音楽的な響きがあって、耳に優しい。目をつぶって聴けば島の風景が浮かぶよう。唄は英語の曲一曲とゲール語と英語が混ざった曲一曲以外はゲール語。ハープやホイッスルやギターやフィドルが伴奏に入る曲もあるが、不思議なことにそれらの曲は、むしろ彼女のアカペラを引き立たせる役を果たしている。悠々たるアイリッシュ･シンギング･アルバムだ。ブックレットも充実。2019作。Cló Iar-Chonnacht)

*DIANE NI CHANAINN:Idir Muir Agus Sliabh　C

(家族は伝統音楽一家でドニゴールのファルカラでバーとレストランを家族経営しているというゲーリック･シンガーのDianeの"Traditiona Irish Song"アルバム。フィドルはAltanのマレードの父親のFrancie Mooneyから習ったという。Dianeの本デビュー･アルバムはカチコチのトラッド･アルバムでも、またコマーシャル仕立てのトラッド･アルバムでもない。中庸というかふっくらとふくよかなゲーリック･ソング･アルバムだ。それは伝統歌を日常的な唄として親しんだところから生まれる余裕のあるシンギングなのだろう。Donald Shaw,Michael McGoldrick,Neil Martin,Manus Lunny,Charlie McKerron,Liam Bradley,James BlennerhassetそしてMairéad Ní Mhaonaigh等の伴奏者達が奏でる音色もDiane調に合わせて{?}ふっくらとふくよか。2019作。Cló Iar-Chonnacht)

*DYLAN CARLOS･CEIN SWEENEY･JOHN McCARTIN
:Dylan Carlos･Cein Sweeney･John McCartin　C

(突然頭角を現わしたフィドル奏者のDylan CarlosとフルートSweeney部門オールアイルランド･チャンピオンのCein SweeneyとGaradiceのメムバーでギター奏者のJohn McCartinのトリオによる空前絶後のアイリッシュ･セッション。Cavan,Leitrim,Roscommonの伝統音楽のフォロワーを自称するトリオだが、選曲は全アイルランド的範囲でメドレーの組合わせも超地域的で、彼らの好みのままに即興的なセッションを繰り広げる。とりわけフィドルとフルートの阿吽のコンビネーションには息をのむ。パブでこんな演奏を目の当たりにしたら、誰もが驚喜必至。w.Donal Lunny{ﾌﾞｽﾞｰｷｰ他。7曲参加}、John Joe Kelly{ﾊﾞｳﾛﾝ。3曲参加}。Produced by Dave Sheridan & John McCartin。2019作。Carlos,Sweeney,McCartin)

*LYNNSEY WEISSENBERGER & TREASA HARKIN:DYAD　C

(ダブリンのITMA{ｱｲﾘｯｼｭ･ﾄﾗﾃﾞｨｼｮﾅﾙ･ﾐｭｰｼﾞｯｸ･ｱｰｶｲﾌﾞ}に勤務する

Lynnsey Weissenberger{ﾌｨﾄﾞﾙ}と Treasa Harkin{ｱｺ}の共演盤。録音場所も ITMA のスタジオ。公的なコレクションの中から、これまでにレコーディングされたことのない曲などをフィドルとボタン･アコーディオンのコラボで演奏したものだが、それぞれの楽器の音色がクリアーな上に、ハーモニーを意識したバランスの取れた演奏は爽快で気分をリフレッシュしてくれる。モーニング･ティーに合いそうな爽やかアイリッシュだ。全 13 トラックの全 33 曲。2019 作。Lynnsey & Treasa)

*CHERISH THE LADIES:Heart Of The Home A

(Nollaig Casey{ﾌｨﾄﾞﾙ}が準メムバーとして参加の Cherish の本作は、アイリッシュ･シンガーの Kate Purcell にオールアイルランド･チャンピオン･シンガーの Molly O'Riardan のほか Nathan Carter、Don Stiffe、Ennis Sisters などをゲスト･シンガーに迎えて、まるで音楽を通して涙あり、笑いありのライヴ･ショーを観ているような、あの手この手で、様々なアイリッシュ･ミュージックを楽しませる。ゲスト:Donnchadgh Gough{Danú},Trevor Hutchinson {Lúnasa}。2018 作。Cherish The Ladies)

*JOHNNY ÓG CONNOLLY:Fear Inis Bearachain C

(コネマラの Inis Bearachain 島出身の"King Of The Melodeon"と呼ばれた Johnny Connolly の息子で同じくメローディオン奏者の Johnny Óg Connolly のソロ。100 年前から受け継がれているアイリッシュ･ダンス音楽の基本演奏を聴くかのような安心感の感じられる大樹のような音楽。2018 作。Cló Iar-Chonnacht)

*JOHNNY ÓG CONNOLLY:Aisling Yoshua(Joshua's Dream) C

(Johnny Connolly の息子の Johnny の 2011 年のアルバム。いやはやノリに乗ってる。清々しく若々しい。メチャ最高。w.Brian McGrath ,Mick Conneely,Garry Ó Briain,Frank Kilkelly,James Blennerhasset そして Jonny Connolly。2011 作。Og Music)

*SEAN RYAN & PJ MALONEY

:Traditional Music Of Ireland Volume One ¥2390

(Seán Ryan{ﾌｨﾄﾞﾙ} & PJ Maloney{ﾌﾙｰﾄ}は 1956 年のデュエット部門の、そして PJ は 1958 年のフルート部門のオールアイルランド･チャンピオン。本作は 1959 年の録音で Avoca というレコード会社からリリースされた LP 音源をデジタル･リマスターしてＣＤ発売したもの。二人のフィドルとフルートはよくうたい、よくハモる。60 年も昔の演奏とは思えない新鮮さだ。1959 年/2019 作。SeanRyan2)

*SEAN RYAN:Sean Ryan ¥2890

(副題"A Collection Of His OwnCompositions & His Versions Of Well Known Traditional Tunes"。デジタル･リマスターによる二枚組ＣＤ。Seán Ryan & PJ Maloney の演奏を聴いたあとに本作を聴いたら面白い。当たり前のことかも知れないが、一瞬同じ音源!?と思ってしまうくらい二人の演奏から Sean のフィドルを取り出したかのような音楽。演奏スタイルも音色も変わらない。収録年は 1959 年から 1982 年まで。Joe Burke はブックレットに「本作は彼が伝統的フィドル･ミュージックに育んだ美しさの実例」と書いているが、アイリッシュのダンスのリズムがふんだんだが、清く美しく聞こえる。解説書{ブックレット}付。全 51 トラック。SeanRyan1)

*GRAINNE HOLLAND:Corcra C

(ベルファスト出身の女性アイリッシュ･シンガーの Gráinne

Holland の新作で三枚目。全曲自作曲で大半の曲がゲール語の歌詞。Flook 風アイリッシュのそよ吹く風サウンドに乗ってシンギングする Grainne の唄は、ゲール語の唄でありながらも、Mary Black がうたうアイリッシュ・ソングのような輝きと親しみが感じられ、言葉の壁を超えて心に響く。2019 作。Grainne Holland)

*BACKWEST:Heritage Hall C

(ゴールウェイを拠点に活動する Backwest～Maureen{ﾌｨﾄﾞﾙ、ヴｫｰｶﾙ} & Brendan{ｱｺ} Browne 兄妹に Fabian Joyce{ｷﾞﾀｰ、ヴｫｰｶﾙ、ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ}と Lord Of The Dance の Peter Vickers{ﾊﾞｳﾛﾝ他}～の新作。Maureen & Brendan 兄妹によるフィドルとアコのコラボを音楽のコアにして、ギターとバウロンが共演＆競演＆饗宴する仕掛けのアイリッシュだが、兄妹のフィドルとアコの変幻自在なジャンプ力ある演奏は神業レベルで、二人の阿吽のコラボを聴いているだけで、身体が熱くなってくる。おまけに Fabian Joyce のシンギングは心にグサっ。百戦錬磨の貫禄のアイリッシュ。2018 作。Backwest Music)

*LIZ CARROLL・JAKE CHARRON:Half Day Road B

(Liz Carroll の新作はカナダのケルティック・トリオの East Pointers{2017 年 Juno 賞受賞}のメムバーで、ギター＆ピアノ奏者の Jake Charron。これぞ Liz Carroll！と声を上げてしまう気力に充ちた絶品のアイリッシュ・フィドル。本作はギターでもピアノでもアイリッシュが弾ける新進気鋭のミュージシャンとのコラボ。Liz のアイリッシュはさらにレベルアップ。ゲスト:Joannie Madden。2019 作。Liz Carroll and Jake Charron)

*STRING SISTERS:Between Wind And Water B

(Mairéad Ní Mhaonaigh{Altan},Liz Carroll,Liz Knowles, Catriona Macdonald{Blazin' Fiddles},Annbjørg Lien,Emma Härdelin{Garmana,Triakel}のアイルランド、北米、スコットランド、北欧のトラッド・シーンを代表するフィドル・グループ"String Sisters"の二枚目。w.Tore Bruvoll, Dave Milligan,James Mackintosh,Conrad Molleson。2018 作。String Sisters)

*STRING SISTERS:Live(一枚目。2007 作。Heilo) B

*EILEEN GANNON:The Glory Days Are Over B

(アイリッシュハープ奏者 Eileen Gannon の本作は、余計な飾りっ気のないすっぴんのアイリッシュハープ・ソロ。アイルランドの「フラキョー」をはじめ数々のハープ・コンテストで賞を受賞という彼女のハープ演奏は、いやはや生真面目というか、精緻というか、魔法の指と思ってしまうくらい、様々な、どんなリズムのアイリッシュ・ダンス曲をも見事に弾きこなす。最高レベルの模範演奏。音楽そのものも新鮮だが、ほとんどの曲があまり馴染みのない曲ということも耳に新鮮。13 トラックの 24 曲。2018 作。Eileen Gannon)

*BY HECK:A Toast To The 1920's C

(1911 年にニューヨークに移住し、米国でのアイリッシュ・ミュージック黄金期の先導役を果たした Mick,Joe&Louis の Flanagan 兄弟の初録音が 1921 年。本作は By Heck～Frankie Gavin{ﾌｨﾄﾞﾙ},Martin Murray{ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ},Emma Corbett{ﾒﾛｰﾃﾞｨｵﾝ},Carl Hession{ﾋﾟｱﾉ}～を名乗るアイリッシュの三人のツワモノ達＋Flanagan 兄弟の故郷出身の女性メローディオン奏者の一姫三太郎が Flanagan 兄弟に捧げたアルバム。Flanagan 兄弟の音楽自体が大衆受けするノリ抜群のアイリッシュだが、彼らは兄弟達のレトロだが、ビンビン躍動

するアイリッシュのスタイルをベースにしつつ、超絶な演奏で音楽をブラッシュアップする。メチャ凄い。2018 作。By Heck)

*ALEC FINN:Blue Shamrock A

(デ・ダナンの創設メムバーの Alec Finn の 1994 年のソロ・アルバム。"Irish Airs Played on Guitar and Bouzouki"という副題そのままのブズーキとギターによるアイリッシュのエアー曲集で、厳かで気品ある珠玉の演奏の数々は、追悼の曲のような印象で、涙を誘う。共演者は Sean Ryan,Mary Bergin,Tommy Keane,Clare O"Donaghue,Dearbhaill Standun,Garvan Gallagher,Andrew Boland。1994 年。Alec Finn)

*KAREN TWEED & TOM McELVOGUE:Luckpenny C

(アコの Karen Tweed とアイリッシュ・フルートの Tom McElvogue のデュオ・アルバム。二人で本作を作ろうと思い立ったとき、二人の友人の Paul Ruane{1967-2016}は闘病中だったという。本作は結果的にその亡き友人に捧げるアルバムになったのだが、Karen のアルバムとしては、久しぶりに「アイリッシュ」した音楽。それも若い頃に演奏するのが楽しくて演奏していた頃の初心に帰った無心のアイリッシュ。2017 作。TMc Productions)

*CIORRAS:Silver Lining A

(アイルランドのテレビ局 TG4 の Donal Lunny の番組で結成された七人組アイリッシュ・トラッド。グループ"Ciorras"の爽快デビュー作。楽器編成はフィドル、、コンサーティーナ、各種フルート{ﾌﾙｰﾄ奏者三名。ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ奏者とﾊﾟｲﾌﾟ奏者がﾌﾙｰﾄも演奏}、イリアン・パイプス、ホイッスル、ピアノ、パーカッション、バウロン、ギター、ベース、そして紅一点 Ciara Cunningham 嬢の魅惑のヴォーカル。全て調和が取れて、出来過ぎのデビュー作だった。2010 作。Wispy Cloud)

*NORAH RENDELL & BRIAN MILLER:Wait There Pretty One A

(アイルランドのテレビ局 TG4 の Irish Traditional Music Awards で"Vocalist Of The Year"賞受賞の Outside Track のヴォーカル&アイリッシュ・フルート奏者の Norah Rendel とギター奏者の Brian Miller の 2007 年のアルバム。アイルランドの伝統歌の数々をうたう Norah のシンギングは春の涼やかな風のように気持ちよい。フルートの演奏も、例えアップテンポのダンス曲でも、涼やか。涼やかな気分の終わりは、ロバート・バーンズ収集の子守唄"Oh, Can Ye Sew Cushions?"。2007 作。Two Tap)

*BAIDIN FHEIDHLIMI - Gael Linn Singles 1968-1980 A

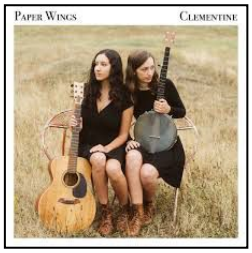
(Johnstons,Sean O Se,Ro-og Breandan O Duill&Skara Brae, Triona Ni Dhomhnaill,Maighread Ni Dhomhnaill,Michael O Domhnaill&Donal Lunny,Dermot O'Brien 他。Gael Linn の稀少音源からの全 20ﾄﾗｯｸ。2013 作。Gael Linn)

*GRAINNE HAMBLY & WILLIAM JACKSON
:Music From Ireland And Scotland C

(二台のハープが綾なすハープ・ミュージックは格別。父娘の差のあるウィリアム氏とグローニャ夫妻、そしてどちらかと言えばケルティックな優美ハープを信条とするウィリアム氏とダンス曲を得意とするのグローニャだが、本作はウィリアム氏がグローニャのハープを自分の器の中で生かす形で、ケルティックな美しい綾と彩を創り出している。グローニャ・ファンは優美なハープに彼女の大人っぽさ或いは新境地を覚えるかも知れないし、

ウィリアム氏のファンは芯になるスピリットを獲得したように感じるかも知れない。どちらにせよ、本作は二台のハープによる天下一品のアイリッシュ&スコティッシュ・ミュージックであることは間違いない。2009 作。Mill)

[CD/ＵＳＡ{ﾄﾗｯﾄﾞ、ｱﾊﾟﾗﾁｱﾝ他}]



(Paper Wings)

*PAPER WINGS:Clementine A

(Paper Wings は Emily Mann{ｳﾞｫｰｶﾙ、ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ}と Wilhelmina Frankzerda{ｳﾞｫｰｶﾙ、ｷﾞﾀｰ、ﾌｨﾄﾞﾙ}の若き女性デュオで本作は二枚目。Emily は The Crooked Jades のツアーメムバーで Bruce Molsky や John Herrmann の影響を受けたという。Wilhelmina は National Twin Fiddle Championship の優勝者で SSW。ギターとバンジョーとフィドルを奏でてうたう Paper Wings の音楽は歌唱法も音楽も古き良き米国オールドタイム～アパラチア民謡スタイルのオリジナル・ソング。現代っ子の二人はどっぷりと古き良き音楽の世界に浸かって、凄腕の溌剌とした、そしてたまにとぼけた味のある演奏で、自作の唄をオールドタイミーな風に乗せてシンギングする。古臭く聞こえもするが、音楽はギャルのフレッシュさに満ちている。紙ジャケでラップ包装なし。2019 作。Paper Wings)

*WE BANJO 3:Roots To Rise Live C

(Enda & Fergal Scahill 兄弟と Martin & David Howley 兄弟の四太郎の"We Banjo 3"の新作は米国ミシガン州でのライヴ。何だ、この盛り上がりは！バンジョー、フィドル、マンドリン、ギター、バウロン等による音楽は見事にアイリッシュとブルーグラスやオールドタイム・ミュージックとのモザイク音楽をエネルギッシュに生み出していて、圧巻。David Howley のヴォーカルは米国フォーク～ブルーグラス色がにじみ出ているから、アイリッシュ・ファンのみならず、米国のカントリーやフォーク・ファンの感性をくすぐるだろう。米国ルーツ音楽の目線で聴くと、ご先祖の音楽と一体化した音楽として、超魅力的に聞こえてくる。前作"Haven"は RTE Radio 1 の"Folk Album of 2018"賞を受賞。2019 作。We Banjo 3)

*THE OTHER YEARS:The Other Years A

(The Other Years は Anna Krippenstapel と Heather Summers の誕生日が三日違いの女性二人組。Anna は SSW の Joan Shelley のフィドル奏者。二人ともにシンガーで、伴奏楽器はフィドルとバンジョーとギター。彼女達の音楽は Jean Ritchie や Hazel Dickens を思い出させるアパラチア民謡やオールドタイム・ミュージック。2018 作。No Quarter)

*JEFF WARNER:Roam The Country Through B

(フォークソング収集家でフォーク・シンガーの Anne & Frank Warner 夫妻の息子 Jeff Warner のソロ。ギターやバンジョーやコ

ンサーティーナを奏でながらうたう唄は、そのまま米国古謡の素朴な味わいに充ちていて、うっすら英国トラッドの世界へとつながる味わいの唄もある。それもその筈？Pete Coe の音楽パートナーで英国のトラッド･シンガーの Alice Jones が大半の曲でヴォーカル･ハーモニーとホイッスルなどの演奏で共演している。
全 17 曲。WildGoose)

[CD/ＡＵＳＴＲＡＬＩＡ]



(Luke Plumb&Kate Burke)

*LUKE PLUMB & KATE BURKE:Luke Plump & Kate Burke C
(元 Shooglenifty で、近年 Andy Irvine との共作"Precious Heroes"をリリースした Luke Plumb と Kate Burke & Ruth Hazleton の Kate Burke が組んで、滅茶苦茶素晴らしいフォーク/トラッド･アルバムを発表した。おそらく Andy との共作アルバムと同様、Luke が Kate のヴォーカルに惚れ込んでアルバム制作を持ちかけたのだ ろう。聴くともちろん"Crazy Man Michael"などの Kate の英国フ ォーク調のシンギングに惚れ惚れとしてしまうと同時に、Luke っ てこんなに唄が上手かったの！と驚いてしまうほど、毅然としたシンギングに惚れ惚れとしてしまう。さらにずっと鳴り続ける Luke のマンドリンとブズーキの音色が気品があって気高く、二人のシンギングの味わいを鮮やかに浮き上がらせている。あくまで感覚的にだが Fotheringay のアコースティック版、あるいは Sandy Denny & Trevor Lucas 風のイメージを持った。w. John McCusker, Jarlath Henderson, 。2019 作。Kate Burke & Luke Plumb)

*SIMON BRADLEY & LUKE PLUMB:Wintering Out B
(スコティッシュ･フィドル奏者の S. Bradley と当時 Shooglenifty の L. Plumb のフィドルとブズーキのコラボ。スコティッシュ、アイリッシュそしてアストゥリアスの曲を初雪の新鮮さで清々しく演奏する。ヤッホーの気持ち良さ。2004 作。Shoogle)

*KATE BURKE & RUTH HAZLETON:Swapping Seasons A
(オーストラリアの女性ヴォーカル･デュオの三枚目。かつてのベストセラー。2002 作。Kate&Ruth)

*KATE BURKE & RUTH HAZLETON:Summer's Lonesome Tale A
(アイルランドと英国のフォーク＆トラッドと米国のオールドタイム･ミュージックがほどよくブレンドされた Kate&Ruth の四枚目。かつてのベストセラー。ゲスト:Andy Irvine, Bruce Molsky。2007 作。Tradsville)

[CD/ＬＡＰＬＡＮＤ]

*VILDÁ:Vildaluodda/Wildprint B
(Vildáはフィンランドのラップランド地域のヨイク･シンガーの Hildá Länsman{ヴォーカル、ドラム}とフィンランドのアコ奏者の女性二人組。Vildáの音楽はヨイクのシンギング･スタイルのシンギン

グとフィンランドのトラッドのスタイルとを結合させたコンテンポラリー･フォークで、ヨイクの持つミステリアスなムードを最大限に生かしたシンギングと、Hildáのヨイクと響き合う即興的で新感覚なアコ･サウンドは、新たな魅惑のヨイク音楽をかなり高い精神力を保って創り出している。Hildáのシンギングはむしろヨイクの呪縛から解放されて、自由に羽ばたく鳥のよう。ヨイクが舞い、走り、祈り、癒し、別世界へと誘う。こんなヨイク聴いたことがない。2019 作。Nordic Notes)

*ASSU:Assu B

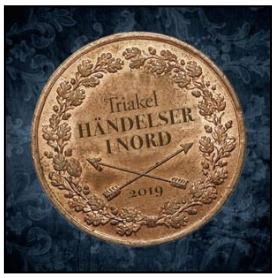
(Áššu はサーミの伝統的なヨイク･シンガーの Ulla Pirttijärvi のシンギングをフィーチャーした三人組。Ulla がうたうヨイクの濃さは、並外れている。霊的というか節回しには聖と俗が混ざり合って至芸の域。素晴らしいのは彼女のシンギングのみならず、彼女のヨイクにインスパイヤーされて共演者になったという各種ギターの Olav Torget と各種打楽器の Harald Skullerud の演奏のエスニックさとその即興的音楽の精神性の高さ。彼ら本来の音楽性は西アフリカ音楽だが、二人は Ulla の高潔な唄と出逢ったことで、西アフリカ音楽から学んだ演奏技術と感性をフルに発揮して独自のヨイクの音楽へと深化させ、類い稀なヨイク音楽へとレベルアップしている。2019 作。Bafe's Factory/Nordic Notes)

[CD/ＤＥＮＭＡＲＫ]

*ANJA PRAEST MIKKELSEN:Hemmeligheden/The Secret B

(女性クラリネット奏者 Anja の本作はその響きからクレズマーのクラリネットの響きと重なるが、生み出される音楽は詩情豊かで、音楽はデンマークのダンス音楽。完全な独奏はなく、フィドル、ピアノ、フリューゲルホーン、アコ、ギター、チェロ、タップなどとの共演で、繊細で瑞々しい女性的な感性が全編に行き渡った優雅なダンス音楽として結実している。2008 作。Go')

[CD/ＳＷＥＤＥＮ]



(Triakel)

*TRIAKEL:Händelser I Nord B

(今年で結成 24 年を数える Triakel の５年振りの新作。メムバーは Garmarna の Emma Härdelin{ヴォーカル、フィドル}, Hoven Droven の Kjell-Erik Eriksson{フィドル}, 元 Hoven Droven の Janne Strömstedt{ハーモニウム}の三名。本作はスウェーデン各地に残るフォーク･ソングを掘り起こし、琴線に触れる実際の出来事の物語歌であるフォーク･ソングに真摯に身を寄せ演唱したアルバムで、彼らのアルバムの中で、おそらく最も"Folk Song"なアルバムだろう。Emma のシンギングは、良い意味で角が取れて、素直。その素直なシンギングが唄の悲喜交々感をピュアに真っ直ぐに伝

えていて、心に響く。二人の先鋭演奏家の演奏は、まるで子ども達にでも聴かせるように優しく丁寧で心ほっこり。多くのスウェーデンの人々の心を捉えるであろう、よく咀嚼された見事なフォーク・ソング・アルバムだ。英語解説付 P48 のブックレット付。2019 作。Westpark)

*GARMARNA:Vitrad(1995 作。Xource) C

*GARMARNA:Hildegard Von Bingen(2001 作。MNW) C

*GROUPA:Fjalar B

(Sofia Karlsson がヴォーカルの Groupa の 2002 年作はスウェーデンのトラッドの奥行き深く、清新なスピリットみなぎる無敵のトラッド。北欧トラッドの傑作。2002 作。Xource)

[CD/ＦＩＮＬＡＮＤ]

*PAUANNE:Pauanne B

(Pauanne は Kukka Lehto{ヴァイオリン}、Tero Pennanen{ハモンドB3、キーボード他}、Janne Haavisto{ドラムス、パーカッション}の一姫二太郎のトリオ。トリオ自体はトラッド・バンドとして強烈な個性はないのだが、なぜか本作は北欧のトラッド・アルバムとして Hedningarna 級に強烈なフィニッシュ・トラッドを創作している。それはなぜか？実は本作はアーカイヴ・テープ等に収録された過去に生きていた民謡歌手の唄とのコラボを試みたアルバムで、主に古老と思われる女性シンガー{達}の唄をフィーチャーしたトラッドの何とラディカルな味わいなこと！これは上手いやり方だと感心しつつ、その絶妙なコラボから生まれる土俗性を色濃く保持した音楽の醍醐味に舌鼓を打たされる。と同時に昔の民謡歌手の凄さに驚かされる。圧巻。2019 作。Nordic Notes)

[CD/ＮＯＲＷＡＹ]

*SVARTEVJA:Svartevja B

(屈指の女性トラッド・シンガーの Camilla Granlien がヴォーカルの三姫一太郎の北欧トラッド・グループ"Svartevja"のデビュー作。ノルウェー中央部のガウスダール地方とリレハンメル地方のトラッドで、Camilla{ヴォーカル、コントラバス}以外の Johannes Selvaag, Nina Fjeldet, Mari Skeie Ljones の三名はハルディングフェーレ奏者。三人のハルディングフェーレの演奏はソロ演奏したり、デュエットしたり、セッションをしたりと、どれもこれも伝統的なノルウェーのトラッドの香り高い演奏で、北欧の空高く響くような音楽は、野原で生演奏を聴く気分。そんな音楽に野に咲く花的な Camilla のお化粧っ気のないトラッド・シンギングがよく似合う。滅茶苦茶気持ちの良いノルウェーのトラッドだ。2018 年。Ta:lik)

*KIRSTI BAKKEN KRISTIANSEN:Linden B

(子ども時代を Gjøvik{イェービク}という町で過ごしたという Kirsti Bakken Kristiansen による清く美しいトラッド・シンギング・アルバムだ。地方の民謡収集家の Agmund Hole が 1930 年に刊行したコレクションには Kirsti の故郷の Gjøvik と Vardal の民謡が多く含まれていて、Kirsti 自身「これらの唄を唯一の楽器は自分の声のみ、完全一人で本来うたわれたようにうたうことを選んだ」と語っているように、本作は A.Hole のコレクションから主に Vardal の民謡を北欧トラッド独特の、天空に響き渡るような凛と

した節回しで、完全無伴奏でシンギングしたもの。正に北欧～ノルウェーの女性トラッド･シンギングの真骨頂とも言うべき珠玉の、心洗われる全 17 曲。録音はオスロの教会。2019 作。NORCD)

[CD/ＬＡＴＶＩＡ]

*NAMEJS KALNIŅŠ:Laika gaitā B
(ラトヴィアのカンテレ系民族楽器の Kokle{クークル}の演奏家の Namejs Kalniņšのソロ。Namejs 君はまだ 15 歳。クークル歴は５年という。二人の師匠がクークルの美しいサウンドの世界に導いてくれたという。彼の水面に映る木漏れ日のキラキラ感までをも表現したかのような演奏は細やかで、まるで日の光や森の妖精が舞い踊っているかのように感じられる音楽。そしてその音楽は厳かな気品をも感じられるもの。おそらく彼の心はいにしえのラトヴィア人の魂や森の精と繋がっているいるのだろう。いつまで聴いていても飽きが来ない。2018 作。Lauska)

*RAHU THE FOOL:Rahu The Fool ¥2590
(豪華 CD ブック形ケース仕様の二枚組。二姫三太郎の五人組の Rahu The Fool の音楽はユニーク。ウォッシュボード、ダブルベース、ギター、フィドル、フルートから奏でられる音楽は、米国のジャグバンドや古臭いブルースやジャズやカントリーと東欧風{ラトヴィア風？}のフォークとが混ざり合った異種交配サウンドで、ヴォーカルはウクライナの Uklainians やロシア民謡のような感じもある。古き良き米国音楽に親しんだ連中がラトヴィアの民俗音楽を独自に演唱した音楽のようにに聞こえる。2019 作。
Rahu The Fool)

[CD/BELGIUM,FLANDERS]



(Elixir)

*AURELIE DORZEE,TOM THEUNS FT. MICHEL MASSOT:Elixir B
(Elixir{錬金薬液、万能薬}と題された本作は、イントロのファンファーレの後から音楽が魔法に掛けられたかのように変化し、二曲目はまるで Malicorne を彷彿させる演唱で目ざませ、また次の曲からまるで夢の中で、古代オリエントを旅するような不思議音楽が続く。音楽は作詞作曲の Aurélie Dorzée{ヴォーカル、ヴァイオリン、ヴィオラダモーレ、カズー、プサルテリオン他}と Tom Theuns{ヴォーカル、マンドリン、マンドリンリュート、ギター、シタール、バンジョー他}のオリエンタル調の魔法仕掛けの不思議音楽に各種吹奏楽器奏者の Michel Massot がオリエンタルな音を重ねる。"La Parade des Fous"{愚か者のパレード}というこれまた不思議な曲でこの不思議な音楽は終わる。
裏ジャケには Elixir 用器が７個。正に「真夏の夜の夢」音楽。
2019 作。Home}

*AURELIA:La Creation Du Monde B
(夢幻的ヴォーカル･ミュージックの可能性を追い求める女性シン

ガーの Aurelia{Dorzee}の本作は、不思議な夢世界音楽。その夢世界は西ｱﾌﾘｶ音楽的夢世界。Aurelia の空かけるフィドル演奏とギター名手、Tom Theuns の微細で多彩な乾いたギター演奏、そしてパーカッション奏者の Serigne Cm Gueye の多彩なリズム演奏が不思議な夢世界音楽を創る。感性優先の音楽だが、魂を揺すられるような根源的な何かが感じられる音楽でもある。2012 作。Home)

*MARC MALEMPRE･REMI DECKER:Codicille 2013 B

(副題"Chanson Populaire De Wallonie"。本作は、シンガーでフィドル奏者の M.Malempre とシンガーでギター、コルヌミューズ奏者の R.Decker の二人が、ベルギー南部のワロン地方の村々の伝承歌に注目し、再現しようと作られたワロン地方のトラッド･アルバム。の Marc のシンギングは、元 Malicorne の Gabriel Yacoub のシンギングを想起させる味わいを持ち、二人でハモる唄は Malicorne 風な気高さと土臭さを放っている。「村々の伝承歌」である本作は、音楽の幅が広く、多様なトラッドで深く伝承歌の世界へと誘う。2013 作。Home)

*THE HELEN FLAHERTY BAND:Gazing At The Moon B

(元 Shantalla のヴォーカルで屈指のスコットランド人トラッド･シンガーの Helen Flaherty のケルティック･バンドのデビュー作。Helen のシンギングと Philip Masure のギター＆シターンの妙技を要に、フィドルとフルートがケルティックな芳香を添えるという音楽創りが成されていて、Helen のたおやかなシンギングは、優艶で実に味わい深い。タイトルではないが、「お月見」で夢うつつ気分。2018 作。Appel)

[CD/ＳＰＡＩＮ]



(Gaizca)

*GAIZCA PROJECT:Gaizca Project B

(Gaizca は Ialma,Manu Sabaté,Iñaki Plaza,Ciscu Cardona,Nicolas Scalliet のガリシア、バスク、カタルーニャのミュージシャンによる音楽プロジェクト。シンガーは女性で、彼らは主にそれぞれの地域のトラッドをグループで演唱する。おのずと唄も音楽もヴォーカル担当者の地域性が強く打ち出されてはいるが、アコ、ギター、クラリネット、パーカッション、ドラムスによる異種交配音楽は地域性も出ていて一曲一曲が味わいが異なっていて楽しい。プロジェクト参加の全員が各地域のフォーク･ミュージックを一緒に楽しもう！という精神がばっちり音楽に表われている。広がれ音楽の輪！2019 作。Home)

[CD/ＩＴＡＬＹ]

*BALARÙ:Gravure B

(Balarùは Francesco Cavallero{ﾊｰﾃﾞｨｶﾞｰﾃﾞｨ、ｳﾞｫｰｶﾙ}, Andrea Lopomo{ﾌﾞｽﾞｰｷ、ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ、ｳﾞｫｰｶﾙ}, Ilario Olivetti{ｺﾙﾇﾐｭｰｽﾞ、ｸ

ﾗﾘﾈｯﾄ､ﾌﾙｰﾄ他},Andrea Beltrando{ｱｺ}の北イタリアはピエモンテの四人組トラッド･バンド。本作は、ピエモンテの伝統音楽の魅力に取り憑かれた若者四人が独自にリサーチして創作したピエモンテのトラッドで、彼らのトラッドは、各種楽器の演奏力と表現力が充実した上に、活き活きしていて瑞々しい。1980 年代、La Ciapa Rusa を初めて聴いたときを思い出した。2018 作。Felmay)

[CD/ＢＵＬＧＡＲＩＡ]



(Angelite)

*THE BULGARIAN VOICES - ANGELITE:Heritage B

(1980 年代に初めて「ブルガリアン･ヴォイス」を聴いたときの感動が甦る女性 18 名の合唱グループ Angelite{前身は 1952 年に結成された国営テレビ局の合唱団で、Angelite は 2017 年に結成 30 周年を迎えた}の独特の発声による見事なソロ･シンギングと合唱だ。驚かされるのは、さらに磨きがかかったヴォーカル･ハーモニーとポリフォニックな合唱の妙と感情移入の妙。地上にこの世界に Angelite 在り！の素晴らしさ。2019 作。Jaro)

[CD/KLEZMER,GYPSY,BALKAN 他]



(Romano Drom)

*ROMANO DROM:Give Me Wine B

(1999 年結成のハンガリーの五太郎のジプシー･バンドの Romano Drom の新作。彼らの音楽はルーマニアとモルドヴァのルーマニア語にこだわったジプシー音楽。ルーマニア語のバンド名は「ジプシーの道」の意。Jazsef Balogh のヴォーカルは、アラブ～バルカン風に土俗的でジプシー魂が充満。加えて、ギター、アコ、ヴァイオリン、ダブルベース、パーカッション等によるジプシー･サウンドは、地中海～アラブ～バルカンの幅で多様で躍動的。二人のギター弾きのギターの妙技も聴き物。ジプシー音楽最前線の音楽を目の前で聴いてる感じ。2019 作。Riverboat)

---

*7 月 25 日頃入荷予定の Dick Gaughan の新譜(1982 年のライヴ CD)を除くすべての CD を聴き終わって、SSW もトラッドも特に自分好みの CD が多く、すっかり真夏の夜の夢のような気分です。

*映画会とのセットですが、娘の早弥香が久し振りにハープの演奏をします。真夏の夜の夢ではなく、「真夏の昼の夢」という催しです。以

下ご案内します。ぼくも同行しますので、この日は一日不在になります。
★7 月 28 日(日)Movie&Music 真夏の昼の夢(二回公演)
【出演】生山早弥香(アイリッシュハープ)
【時間】①午前 11 時開場、午前 11 時 30 分演奏、12 時映画上映
②14 時開場、14 時 30 分開演、15 時映画上映
【場所】末永文化センター小ホール（福岡市城南区七隈 1-11-50）
【料金】前売 1500 円（当日 1800 円）＊一作品につき。
＜前売券取扱い＞ちけっとぽーと福岡パルコ店
【お問い合わせ】℡092-581-6352（NPO 法人博多映画道場）
*皆さん、それぞれの「音楽の夏」をお過し下さい。では、注文をお待ちしています。(船津)

